廣恵濟急方

上卷

序
例言
卒倒之類

武
502
1

寛政元年開鐫

廣惠濟急方

躋壽館藏版

それ人の世にあるおほくの中にありて病
ひあるきをいたはりとさぬは神代より
ふかく醫療のみちあはれにつたへ給ひて
司りをも百草をさくめくすりをもまへそと
乃とく代々まへつこゝにしかし小あるをきを
生薬のまことかのかしにて人を仁愛乃體
とは前しもあふさるへしてそ安民の法
東乃御めぐみいたらぬくまもなしおほせ

ま民乃やすきひあらんことをとうときおほむねひて
拯遠我のそかえさせんをとれかし
とさそにつ絲侍醫をめしては座める
まれくあまねくよにおこなはるへきことのあり
ちまたのせまきそのみちとのちまたの
春日多紀元悳小 仰下されしことよ拯遠
すり急症のはつさにのそみて醫を
ちかふまなくまを持さるひりくさし

海遠きあたりハまたさしあたりておそろしく窮
巷なとにいるなとまとへるさ術なきも志られ
いまもはやらいのちおとしぬるもありもす
ふるのつしはなる時ありいつれのよに関ひ
ことうふ座てき經驗乃方を筆し目録く
さはく梅すよろしう代くことよくさし
ままの元乃ままつしえてうきをあまたに係
はまやをそのことの座をもちぬことおもひ

ゑくらし法くの數かしちさ我か國緑く
世にひろしめんハことらか緑のふさきしけ
方達ハなへてこの邦乃家ゝにつたへ婦系
やところをもよひあつしけるを見れハもとの
國にてもとも書きくもと紀の記録くあけめ
すくれぬる我あか英華まこ法と妃させて
書名の妃筆よ天明七年乃書になん
名つけて済急方といふなる法かし志我

法めくみをもてかく世乃まもりとなれ
妃へさせ玉ひし彼の國の傳をうけしなるを
うるハしい乃玄台より書かく達まてもゐへいて
姓名紀を御論ありてそなへさせしむく
泣血帙よりおくれたる小今ありしゆよ
御世つくせおりし海しくかく翫さしくを
うらきとの路程にてうの乃
おのん法とを世小あらりしの川むくゆみの

生育をたすけしめらく此書をゑらまり
しめをへつさよし 命下ましゝ益
民乃御まつりごとをゐやゝさにおほしま
事あぬ志れりはしめ 給ひとうけ給はり
つくへ世界も三嶋但馬守政喜ぬし清翰
すぬりしめ給ふと同しかれはあやうし哉
志るした急く元乃里の志ふよまうせ二ぬ
川のみしりえぬ葉とさりてしるありと

いふ
寛政元年秋八月
中楼監物藤原清翰謹識

序

濟急方刻成安元謂余曰此是
先大君仁民之一事獨序此書者非足
下不可余駭而問故乃徐語余曰距
今十數年矣
先大君一日召臣而問曰仄聞民間疾

疫方其急遽之際無遑請醫或僻遠
乏醫雖請途遙或夜間若阻事而不
來遂至不可救者往往而有是可憫
矣豈無有救急之方可以備不虞者
歟臣不敢妄對退而思之葢救濟方
法非無其書但山野小民亦能可蓄

可辨其可以嘗
上肯者未之有也於是日夜渉獵諸
方書隨得而抄錄夷蠻之奇與大俗
間所傳亦皆采擇不遺裒而成卷因
施諸行事而歷試其功驗亦有年所
已五更其稿而未成書爾後

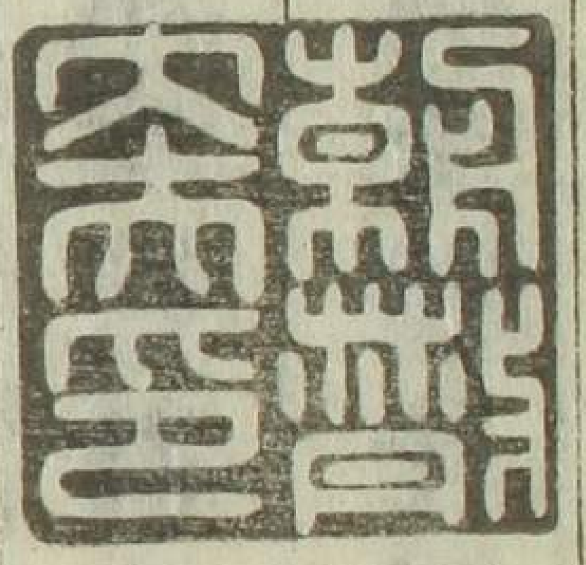
先大君燕間時召侍醫而問民間疾疫
元悳亦在末則五内爲之如爨痛思
奉職無狀而無副仁民之
台慮憤悶將疾矣既而
先大君溘捐萬民元悳慟哭不能起者
數日矣然日夜督兒元簡等就事竟

至今春而書始脱稿焉足下久陪侍
帷幄而與聞其
明命矣是故敢需一言焉爾義行受
而未閲卷愀然酸鼻亦將慟矣於乎
先大君深仁廣德無得而稱哉安元能
體

上古而盡力其職永輔其仁於下焉誰不嘉賞乎余雖不敏豈可不文爲解蔽其忠誠哉乃錄其語以爲之序若夫其書之精選何竢余言四海之民得之則安不得則苦譬之非大旱之膏雨則中流一壺雖欲不貴得乎欲使山野小民常讀而熟知故俚語以國字云安元其氏多紀令嗣字安長亦爲通家久矣

寛政紀元歳次己酉十一月冬至日

肥前守從五位下佐野義行撰



例言

一凡人疾病あらバ醫師に療理を請こと古今の法にして病は慎の道なり然れども暴病あるに臨てハ海隅山陬の民ハ勿論通邑大都といへども折あしけれバ醫は邀て来らず他醫を引とも至らず此時に當りてハ智者も謀を設べき地なく勇者も斷べき處なく白刃も踏べ

爵禄ハ辞するとも此一事においてハ胸中惑亂して收拾すべき處なく人世中あるまじき事の俄に起りしがごとく婦人女子と一般に狼狽周章忠肝孝心の士も亦祈請誠を盡し身を以て代りてん程に思ふ迄なく病の虚實ならびに藥劑の避就を辨ぜず妄りに圓丸艾灸を施し虚するを瀉し實なるを補ひ遂り

活るべき人をして異物となさしむるに至れり療理法の宜しからず死ハ命なり誤藥にて殺すハ横夭なり實に可嘆し故に一服の藥一壯の灸も大なる誤なく生を萬一に望しめんと欲す是此篇の撰ある所以なり

一經傳子史の寶典といへども讀ざれバ其用尾礫に等しきなり本編舊綴るに漢文を

曾て今改め國字をもてするハ病家の人に
して讀で其義を曉志めんが為なり濟
生に志あらん人ハ預熟讀して其大意
を解釋し更日常一通を座右におく
急りに臨て遺忘に備へし豫熟讀して
其大意を得ざれバ事に臨必ず誤ること
多く彼渇して井を穿るが如くなるべし

一凡人疾病ありて療理を施さんとせバ先
其病證を視定べし病證を認るうへに
く鍼灸藥等の相對すべき理法を施すを
事とし古人も百方の藥を探索するハ
一病證を認んがためといへり總人の病に
病因病證といふことあり病因とハ病の根
本なりて草木の根あるがごとし病證とハ病
の状外にあらハれたるをいふ草木の枝葉
あるがごとし病内にありといへども其證外

によりて逢ずれバ何れの病たるを知るべ
からず猶草木の秋冬に枯凋て枝葉なき
ときハ何れの草木なるかを志るべからず然
れども春夏枝葉生に依て其物を識得と
一般にして人の病も其證外に見る故何れ
の病なるかを弁別すべきなり此故に斯編各
門の首に病證を載て其大略を見して後
に方術を舉たり毫髪の見誤ハ人を瞬息

の間に斃すことあれバ最戰兢を加へて忽諸
にすべからず
一通編の諸論皆古人の成説中に於て最精覈に
して今に試て符合する者を撰採て毫
釐も無稽なる臆説なしまづ方藥ハ古今
華夷を論ぜず凡藪澤中の方といへども盡
諸家の方書并に本草に照し考へ数試て
數驗を奏する者にして病家倉卒の用

り便なる者を撰びて故に其方二三味
に過ぎず採索るに易く取るなり
一病名古今同じからず且正名あり謬名あり
大抵古名を穏當とす假令卒倒人事不
省の證は後世卒中風と稱すを素問に云る
古の書物には撃仆と謂七情鬱結して七情
とは憂思喜怒悲驚恐を云昏冒なるを素問に氣厥と以
へり後世これを中氣許叔微と言る人の本事方と云書に始めて

此名は出を名をはしく中とは外來の邪物に中る
いふ中風中毒の類是なり内七情の過極
よるより發たる病は中と稱するは謬り
なるべし卒倒の證原一様ならず然るは
一槩に卒中風と以へるも名をと實を當ら
ざるり似るあり撃仆氣厥の正名にして
穏當なるにしかざるなり然れども本
編各門の病名は皆古今正謬を論ぜず沿

習久しく志く世人の聞覺る者に從
へり亦唯俗便り取るなり

一其用を識ざれバ奇藥靈劑も病を治を
れば益なし獲難の藥と亦其時に用
ゐるさへ其能を識ざれバ眼前物とし
て良藥ならざるなし且急に臨く最
其用をなさしむに足今編中用所の藥品
ハ病家倉猝の際探索に便ある物を擇

く獲やすきもの品をぞ載せへ大抵味噌鹽
酢酒或ハ蔬菜魚類を他人家日用の品に
く有合あるべき物を撰用より已ことを得
得ざるに至りを藥舗鬻所乃物を用ゆ必
細書して藥店にあり𛀁と註し置たり生
草木も亦人家園庭中に栽ある物或ハ道
傍原野に在所の品を撰用し採摘こと
易に取まり且地方異なれバ產物殊なり

時移バ物亦易此ニ有て彼ニ無物あり若
木り縁て魚を求め海ニ入て玉を索バ
獲べからざるに極る此故ニ本編中一
病證ありて數方を臚列するハ其地方
ニ就て用を求さしめんか為なり敢て
博ニ驚かすにハあらじ

一 凡生草木の形状を本草と云へる書ニ説
ところハ皆他の艸木乃枝葉花實乃態相

似たる物を以て比諭すること多し此編ハ
醫家の設にあらず此學に心會なき人ニ
指示とせるなれバ其比べき草木と亦
識ざる人多く地方異なれバ名も殊なる
故今直ニ其形像を圖して略其說を載せ
あり圖ハ春夏秋三時の形狀を寫して其
態度を志らしむ然れども土地ニ沃土
瘠土山陵卑濕乃同じからざるあり又陽

地陰地の別ありて其產する所の地に因て
形狀色相頗異同あることあれバ亦必如
此と言がたし此に寫所ハ東都の人家
園庭に栽物或ハ近郊に產する所なる物
を採て眞寫にせしなれバ恐らくハ關
西或ハ南北方土の地に產する物と違へるも
あらんすれバ觀者心を用て仔細に辨
最疑しきハ須其師に就て研究すべし

一凡藥物ハ其證に依て效驗を奏することを
なして有毒の故にあるにあらず無毒
の故にあるにもあらず只證と對すれバ皆效
あるを對せざれバ俱害あり假令磁石のよく鍼
を引ども芥を拾ことあたはず琥珀よく芥
を拾ども鍼を引ことあたはず是等の
事を見て解釋すべし物類の相感ずるの
きバ誣べからざる所なり然れども其病

を認るをハ老醫といへとも誤るまじと
言難し古人乃詩にも老醫迷舊疾と言
句あり況病家の人の視定無にあらず
されバ此編毎用乃藥品可成丈ハ緩劑を
用て峻劑撃劑を用ず假令吐劑なと如も
鹽湯虀汁の類を用て瓜蒂藜蘆の類を
用ずして如何なれバ若誤用ふるとにも緩劑
ハ害をなすとも亦緩なるゆゑバ遅しといへと

醫師來らバ手段もあるべし峻烈の藥に
して誤用バ害も亦はげしければ手を
下すに遑なき地に至る凡峻劑を用と
不用とハ醫師の手眼にあることなれバ手
眼なき郷鄙の人に峻藥を授用ふるハ
暗室中に集會して一人劔を抜く舞が
ごとく人を傷ざることハ幾希なるべし
一凡病の見る證ちよと見受たる所ハ同様

なるに似て虚實ハ同じからざる所あり寒熱の遁に違る者あり若混殽するときハ利害掌を翻の間にありて仔細に辨別せざればあるべからず此故に醫家にハ診法多端なれども約り其法病人の顔色眼中の精彩を望聲音を聞病情を問脈の至數動靜を切且胸腹背脊より四末を摸索めて邪物の有無を責其他種々の診法をもつて彼

此參伍して異同互に證し其隱微なる所を搜て何れの病と決斷するときハ約り病癥の中に真寒假熱假寒真熱とて似て非なるものありて良醫も失診あることありて熟さるに今醫事を志さゞる人ハ是を紙上の説に依其證を辨ぜしめんことを望ハ最得がたきに必せり本編聊醫事の大體を失ざるに似たりといへども其診法を悉

盡こふし能ハざれ是故よ醫師來らずバ速り
委付く此編の論説よ拘泥べからず

一脉ハ醫家四診の一ふして病を視定るふ
ハ關要なる所なり然るに晋乃王叔
和と云人心中明ふし易く指下ハ了こし
難しと言り心を潜思覃して習熟
せざれバ得難きものなり唐の孫
思邈と云人も脉ハ醫れ大業也と云るも

なりかるを熟るも今病家れ人よ暁し
免んとするハ絶くなきされ事ふ極まり
故よ編中脉法を言及ざれ

一凡灸穴を取の法諸書載る所の説を参考
て古を準とし今を酌く正穴を得せし
め且捷徑ふして病家れ人の極く暁し
易き法を採く擧とすれども二ならぬ
全く得がたし故よ今紙上の文字ふ就く

正穴を得べき法を取く捷法ありといへども口授なくしてハ當らざるの法を載せ

一 凡孔穴を點して灸する凡法其人立て點しるハ立て灸し坐して點したるハ坐して灸すべし臥て點したるも同じ總て人凡皮膚筋骨ともに坐臥に隨ひ申縮ある者なれバ坐臥に依て體たがひ穴所も亦たがふゆへなりこれに由て舊灸の痕ありとも若卒倒して側臥或ハ偃臥さバ灸痕自ゑぶ事あらんなれバ改て正穴に點して灸すべし編中灸穴の圖說を載といへども言ハ意を盡さゞれバ少く齟齬するに似さ數もあらんなれど此意を以て斟酌して其穴を取んにハ大なる誤なかるべし庶幾のるべし

一 凡醫方の原を考究むるも亦一大業と言

へし近來諸家編集の方書拔閲するに往々謬誤あり况管見蠡識ゐして倉卒に論定すべきにあらず且此編撰用する所の者ハ一方といへども必諸家の方書に参互同異を攷最歴試乃方中ニ於て病家所用に便宜とあれをを採まり故ニ姑く救急易方危證簡便驗方等の例に従ひ方の出所を附載せじ

例言畢

廣恵濟急方上巻目録

卒倒之類 人俄にたふれて病の類ひ茲に集む

中風 一丁 氣ぬけうしなひ半身手脚きかず目くちゆがむ證なり

脱陽 十五丁 元氣俄に脱て氣ぬけうしなふなり又大吐下し大に上て後昏憒になる證を附録す

交接昏迷 二十一丁 男子交合時氣ぬけうしなふなり走陽とて男子交合のとき精もれてやまざるを附す

中氣 二十三丁 よいかに氣をさしたをるなり

痰厥 二十五丁 痰胸膈に塞て氣をうしなふなり

中暑 二十六丁 暑に中り倒き死するなり

入井悶冒 二十九丁 皆井窖中の内に入て悪氣に中てたふるゝなり
食厥 三十丁 食物にあたりて倒るゝなり
驚怖卒死 三十三丁 ものおどろきにてめをまはすなり
霍亂 三十五丁 卒に心腹疼痛大に苦悶あり此證二つあり上吐下瀉して苦むと吐瀉なくて苦むとあり詳に本條に載す
疔毒昏憒 四十九丁 疔の出來る初に何ともなく俄に氣を失ふ證并に疔の理法なし疔の理法を附すなり
脚氣衝心 六十丁 脚氣の毒脚より腹に入りむなさきへせきあぐる證なり
積氣暈倒 六十七丁 積氣上へつきあげ氣をうしなふなり疝氣など衝逆あるものも茲に附す
癲癇 七十丁 てんかんにて卒に倒るゝなり
血厥 七十三丁 人卒に死人のごとくになるなり婦人に多し
波也宇知加太 七十四丁
鍼暈 七十六丁 はりして目をまはすなり
入浴暈倒 七十七丁 湯氣に中るなり
酔船 七十八丁 ふねにゑふなり かごに酔ひ山に酔ひしを附す

廣恵濟急方上巻

法眼侍醫多紀安元丹波元悳編輯
男安長元簡 挍

卒倒之類 人卒にたをるゝ病の類をこゝに載

中風 閉脱の二証あり閉ハ實証なり脱ハ虚証なり

閉證病状 人卒に倒奄忽人をしらず歯をくひ志め拳を握り痰潮ごとく喘息し眼口ゆがみ半身かなはず眼を見ひらめ或上竄するハ中風の閉證

なる者是也
凡卒倒して口ひらき手撒眼ハ合大便又ハ小便をもらし鼻聲鼾のめくなるハ脱證にして虚候とハ別に療法ありて後條に載たり實證にも目瞋大小便秘とぢる者ありといへども其口噤手を握るを以て實候とし虚候ハ口と手もともに開く是其證候おのづから同じからざるなり若視あやまつときハ療法も亦大に

誤る心を用ひて診すべし
療法 卒然昏倒せバ先扶して煖なる室に入て嚔嚔を出す法を用ゆ可し其方ハ皂莢細辛等分末となし又ハ天南星半夏 四味共に薬舗に有購ふべし の末を鼻の孔の内へ吹入る可し右しなかれときハ胡椒乃粉を吹入てよし急に胡椒もなくも煙艸の粉を吹入てもよし皂莢末鼻の内へ吹入て頭に髪を提げてひき起す可し其時嚔出るしよしゑ

るしあり奥州邊にあくしよぼくと云木あり此木の葉を揉て嗅バよく嚔出る其地方の人ハ此を可用

右の薬ハ筆の管様乃竹六七寸許に切り其端を少しに削り薬末を抄て病人の鼻孔の中程へ吹込べし餘り奥へ吹入るときハ却て嚔出ぬるなり又紙を引裂紙撚を作り此端へ右の末を傳て鼻孔へよき程に入るも亦よし

次に手の大指の爪にて病人の人中の穴をきつと指付爪あとの付程によしそはし人中の穴後に図あり考ふべし

又急に病人の両手両足を上より先の方までなでおろすべしむきつかりと撫おろすをよしとす痰気を散ず一助なり○又火のよくおこりたる火盆の中へ醋一杯を傾入醋の気を病人の鼻の中へ入る様にして嗅すべし良久して醒此法

中風に限らず一切卒倒の閉証に用てよし

痰壅不省ハ熨薬

をよしとす葱白細に切たるを

三合小麥麩三合糠を用ゆよし鹽二合よく和匀貳包
にわけ炒熱して絹にても木綿にても包み病人
の臍のうへを熨べし

痰壅不省服藥 生姜汁を白湯に攪用ゆべし白礬薬店にあり加へ服させて最良○又方童便と生姜
汁を等分にしまぜ服しめてよし○又方竹瀝淡竹
を長一尺許に截二つに割火の上に架炙て截口
より汁出るそのおり其汁を茶碗様の物に承取
り用ゆ是を竹瀝といふ淡竹なれバ汁多く灌きの
ときハ呉竹にてもかへ用ゆ宜し

まぜて良○又方香油に姜汁を沖攪用ゆ又よし
○又方天南星木香二味共に薬店にあり剉く等分水に
煎し用ゆべし○又方皂莢薬店にあり図説後に出蘿蔔子俗にいふ大根のたね等
分剉て煎じ服せしめ痰を吐

口噤を開藥を灌法 凡人の牙齒おほくハ上齒と
下齒とひちぐひとなるにある者あり其ひとひちが
ひとなる所へ新しき烟管の吹口若新しき烟管なくバ烟管の
吹口の様なる物をはなし込介保人の口忌菜をふく
物を用ゆ

こて其吹口の管よりふき込飲しむべし○又法病人の鼻の孔ゟ急竹の管を差し込此管 筆のぢく様の物よ しより薬を吹込べし○又法鼻をしっかと撮めバ息止りて口自らひらくものあり 軽き症ハ此法よし

又法 介保人を入ねて口禁さる病人の口開くせ薬をのませんとするらバ介保人の左乃大指と中指と此處よて病人の歯のきへとまりれ不れ歯なく空なる所をしっかと按定バ歯自らひらく也此時右の手ゟ薬を灌のすべし小児ハ両方の歯のきへとまりしもともよ歯一枚許あきて空所あり

なる處ゑ大指と中指の爪を入て能よく按バ自ら開くものなり

又法 先病人を扶起し背後へまハり両手四本の指をのべ病人の頤をしっかと押へ人差指を下唇の承漿の處へあて押さげながら両手にて大指を病人の歯乃きへ当り此空なる處を力を極て緊しくおしべし歯自ら開く病人の頭ハ後へ所よしっかとしたる物或ハ介保人の胸か膝頭をあてうごかぬ様よして置べし

又開口噤指齒方 白梅の肉を以て牙関を揩こと數遍すべし白礬を加よく和て擦付てよし○又方天南星の末五分龍脳薬店にあり少し入研和中指の頭へ蘸噤たる歯を揩こと數次して口自ひらくものあり

又開口噤薫方 巴豆を研爛紙に包壓て油を其紙ようつし取て此紙にて撚を作り火を点て吹滅し其烟病人の鼻の中又ハ口中へ入薫て涎を多出すべし

凡口ひらきて薬を灌のませらるゝバ病人の嚥より胸を摩おろすべし

灸法 病人の咽中痰聲ありて鋸を曳がごとくなるハ湯も薬もおさまらざるものあり氣海關元に灸すべし多く灸するをよしとす○口噤て不開ハ聽會頰車に灸すべし又人中頰車百會承漿合谷翳風最よし○凡卒中涎塞不省ハ隠白百會人中絶骨章門風市氣海三里地倉大椎皆灸すべし諸穴後に図あり風市の穴ハ脚氣に出ス○又何を以ても臍中へ

塩を填まうへに灸まる事三百壮許なるべし或ハ妙る塩を臍の中へ実しめ置まうへに生姜一匁ぎ厚く片るを置て灸まるもよし又山椒を臍内へ填しめ並てまうへに灸まるもよしいづれも百壮以上灸してよし

百會

百會の穴ハ頭上にあり此穴を挨には先髪の際を定べし其法稲桿にて大椎より(大椎ハ背の骨なり)大なる骨の眉の心まで此間を量此稲桿を十八に折を尺八すと定此稲桿の端を眉心に當夫より後ろ方へまはし眉心より三寸を前の髪乃際として仮点を付此点より五寸五分に

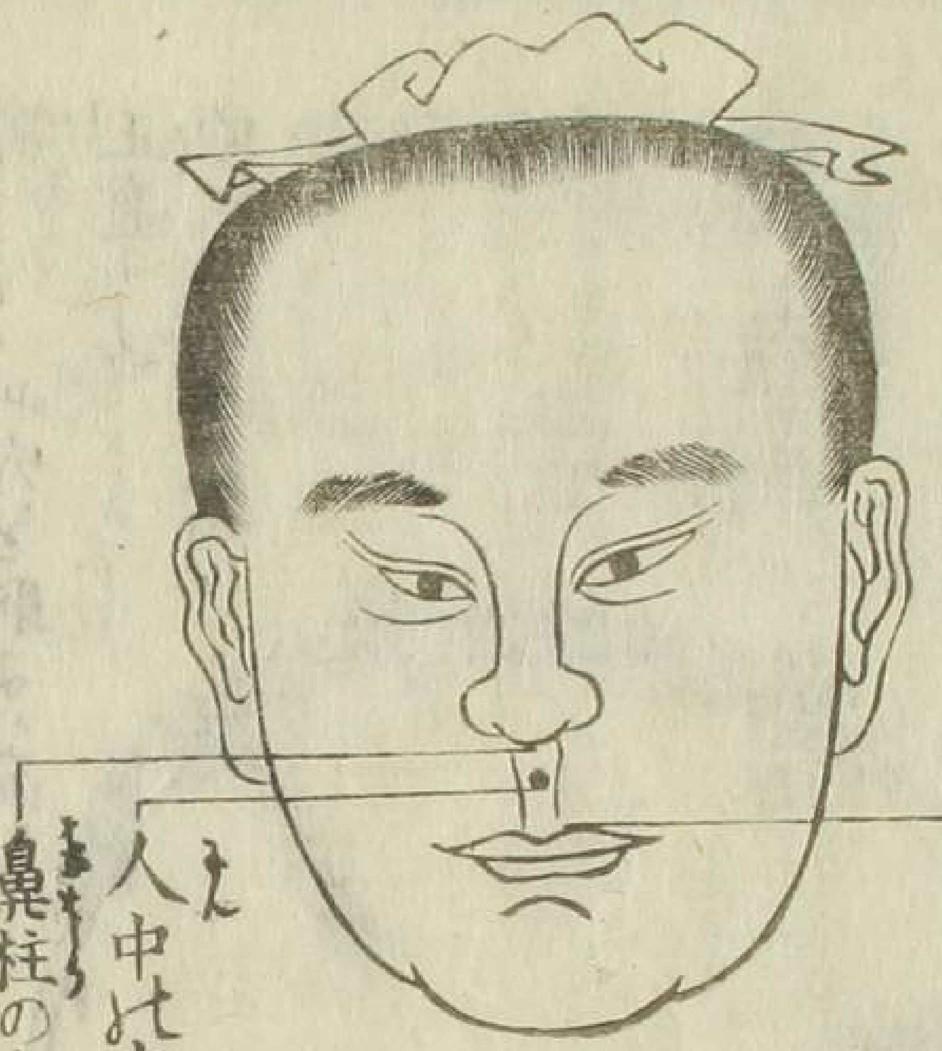
点まんしきも百會れ穴也

此処豆許の凹あり此穴を取に八面を正直にしてとるべし

項頸ハ屈伸れある処なれバ若うつむくと又ハ項のひて寸尺もまさ修なる故正穴を求がたし且稲桿を肉に貼て取べし

眉心より前髪際迄三寸後髪際より大椎まで三寸也六寸に前後髪際乃間壹尺二寸あハせて一尺八寸なり

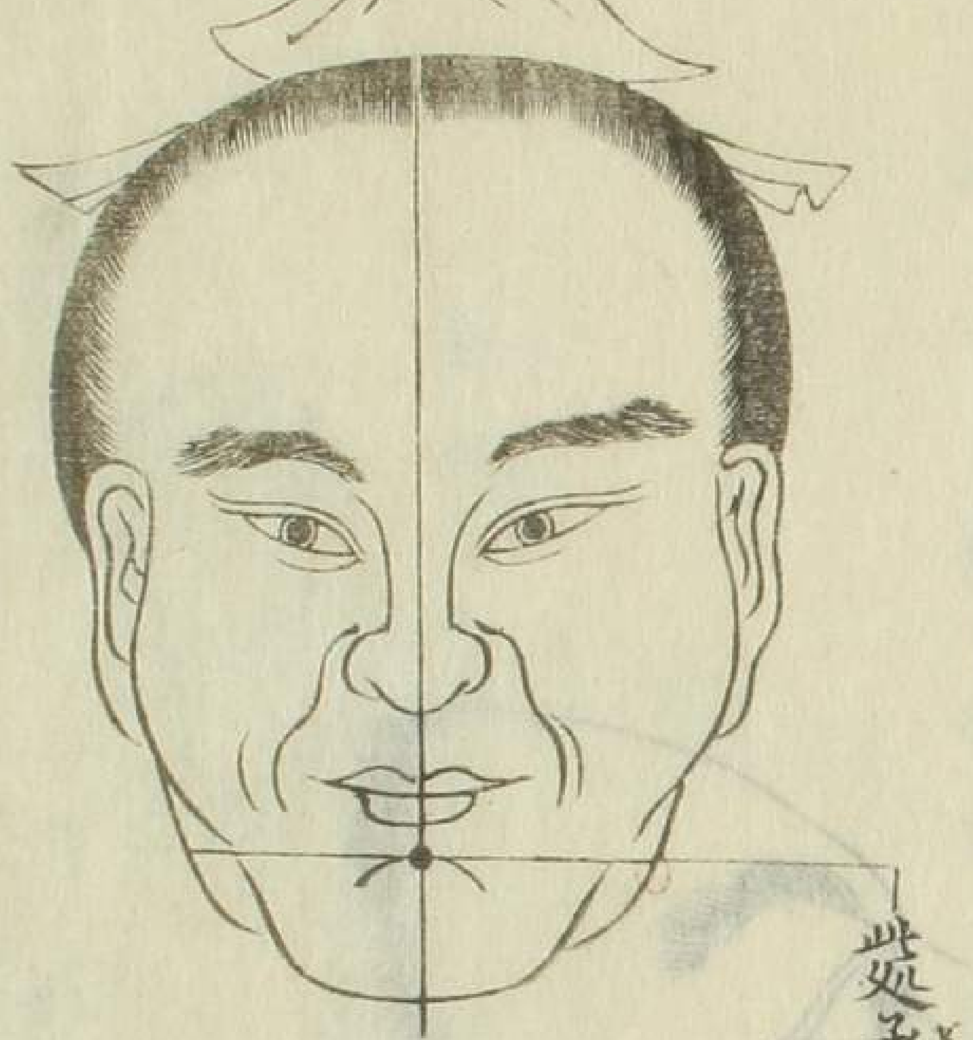
人中の穴ハ鼻の下に在鼻柱と唇乃尖さる処との最中に点すべし此ニハ竪に溝あり此中に付べきなり図を考へ通し



側面より見たる図也

人中の穴人の質まて凸き人あり凹める人あり何れにても鼻柱と唇尖との最中に点すべし

承漿の穴ハ下唇の稜の下に在下唇乃最中の通おとがひまきめの処となり図を考べし



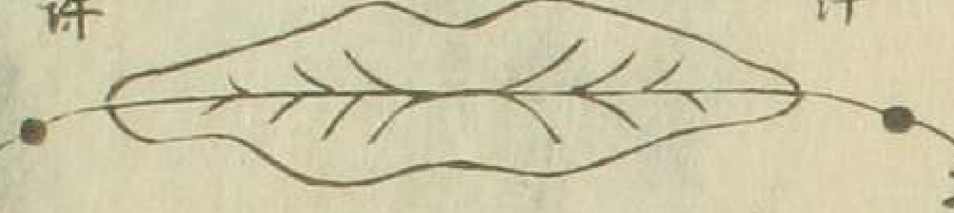
側面より見たる図也

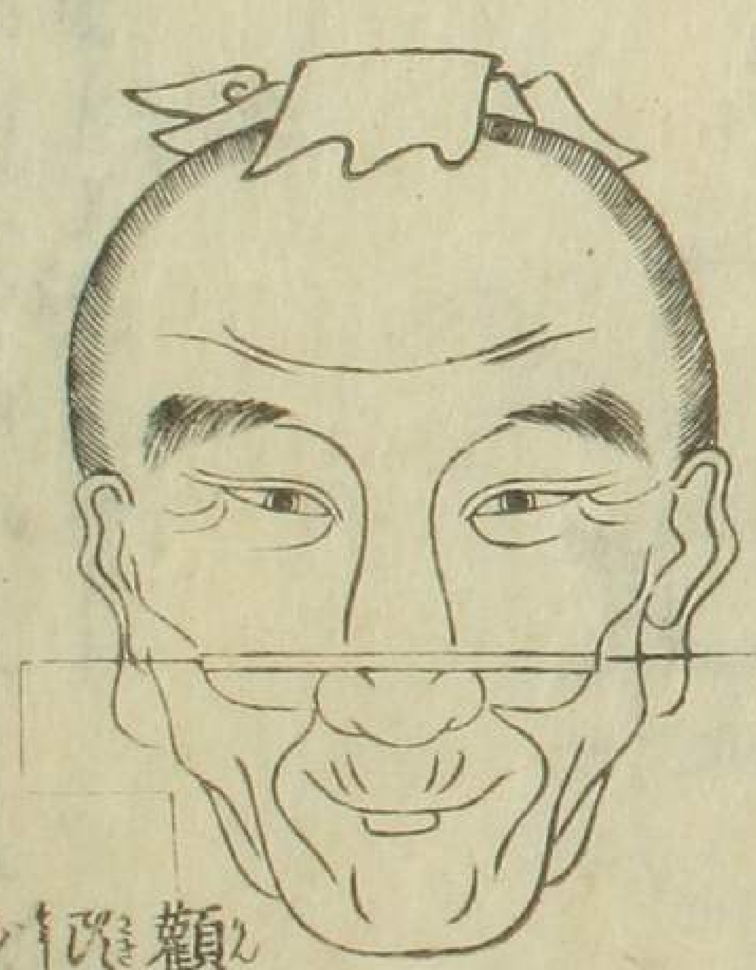
頬車の穴ハ耳乃ほげ祢と云下曲たる骨の角の尖りとれ最中にて二分許前の方へよせて点すべし是穴なり口を閉ぎ此處に穴ありて口を閉ハなし口を開て取べし自試て自得すべし病人も其心を以て正穴を取得べきなり

聴會の穴ハ耳前に在耳の前に高く起たる肉ありこれを耳珠といふ此耳珠の下の闕たる処の前に指頭にて按て口を開ぎ空ある処是なり圖を考べし

翳風の穴ハ耳の後に在耳朶の止の通横に後の方髪の際へ際めて耳の後の圓き骨の下廉の陥なる処是なり
指頭を以て按ば耳中に引く痛是正穴なり

地倉の穴ハ口吻の傍に在此穴口吻を去こと四分許に点すべし是穴なり極めて人の食指と大指を以て内外より撮られバ脈ある処正穴なり寸法ハ面の両顴骨の尖と尖との間を量て量七ツに折七寸と定たる内の四分也

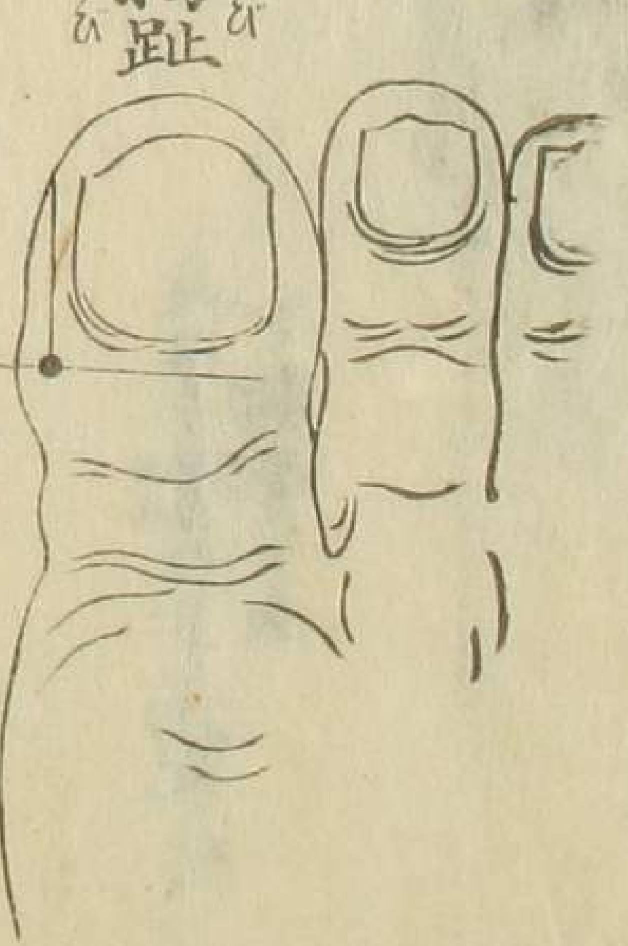




隠白

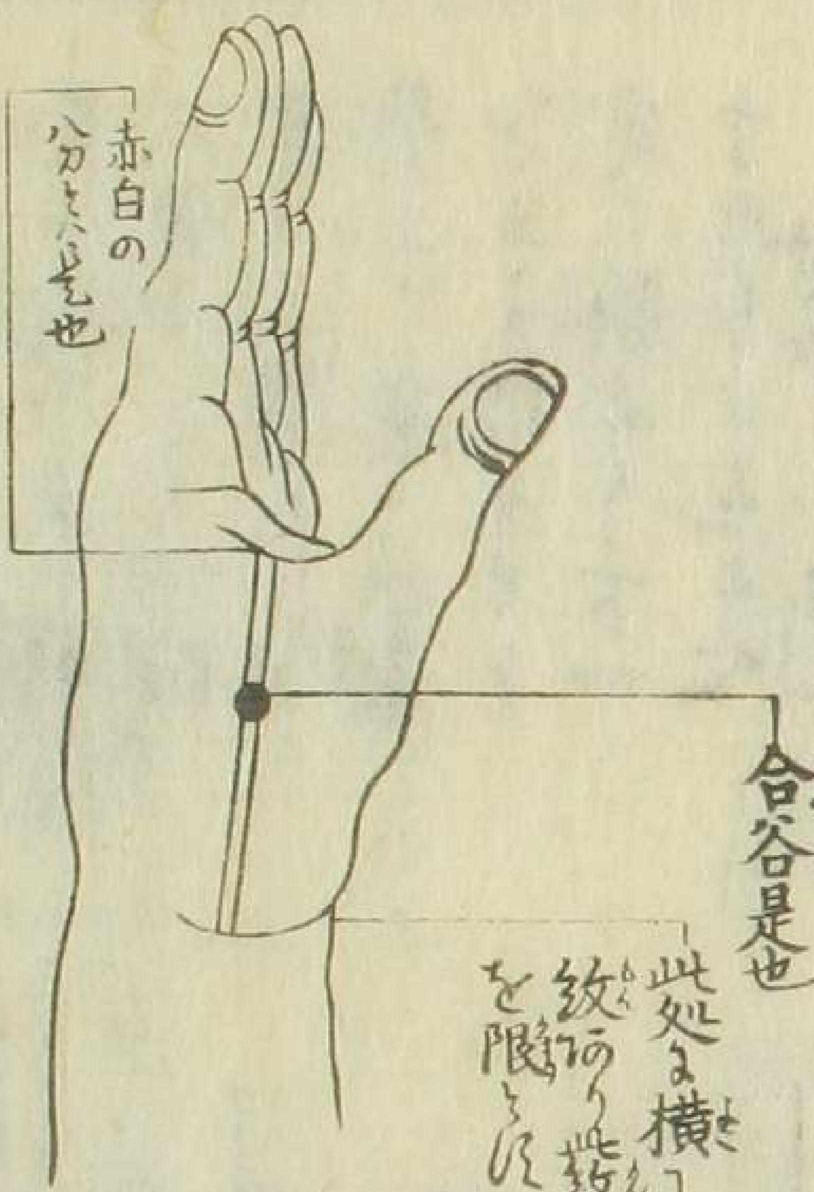
の穴ハ足の大指の内乃方爪のはえぎハの角に在
爪の角を一分許をはなして点すべし

足の内うらと圖にてはかたと云



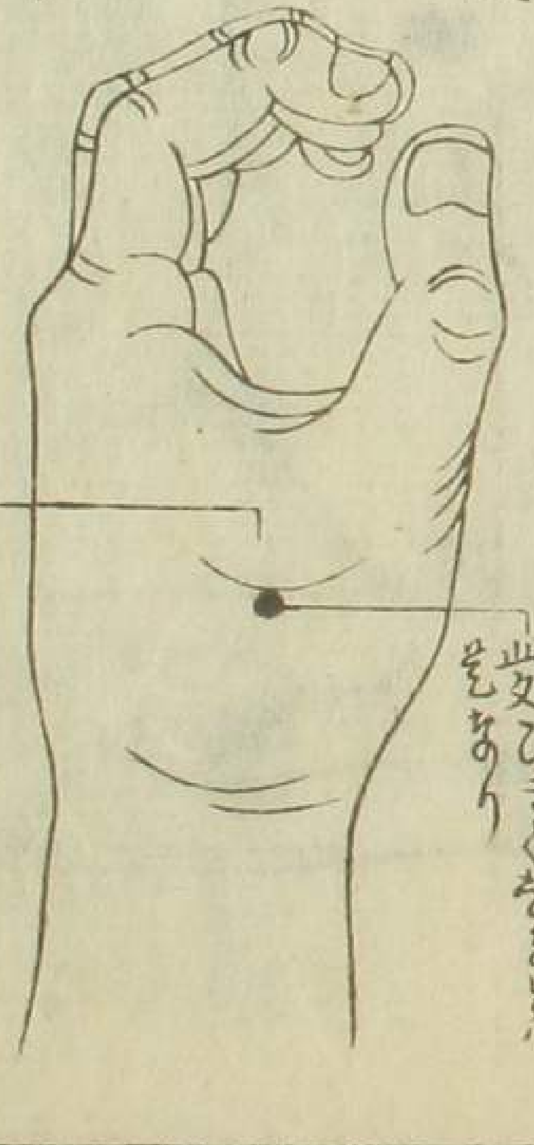
合谷

の穴ハ手の大拇指と人差指との間岐に成たる骨の中央に在 此穴を取にハ両指の岐より腕の横紋の処まで藁にて量り此ところを二ツに折たる最中に点を是穴なり



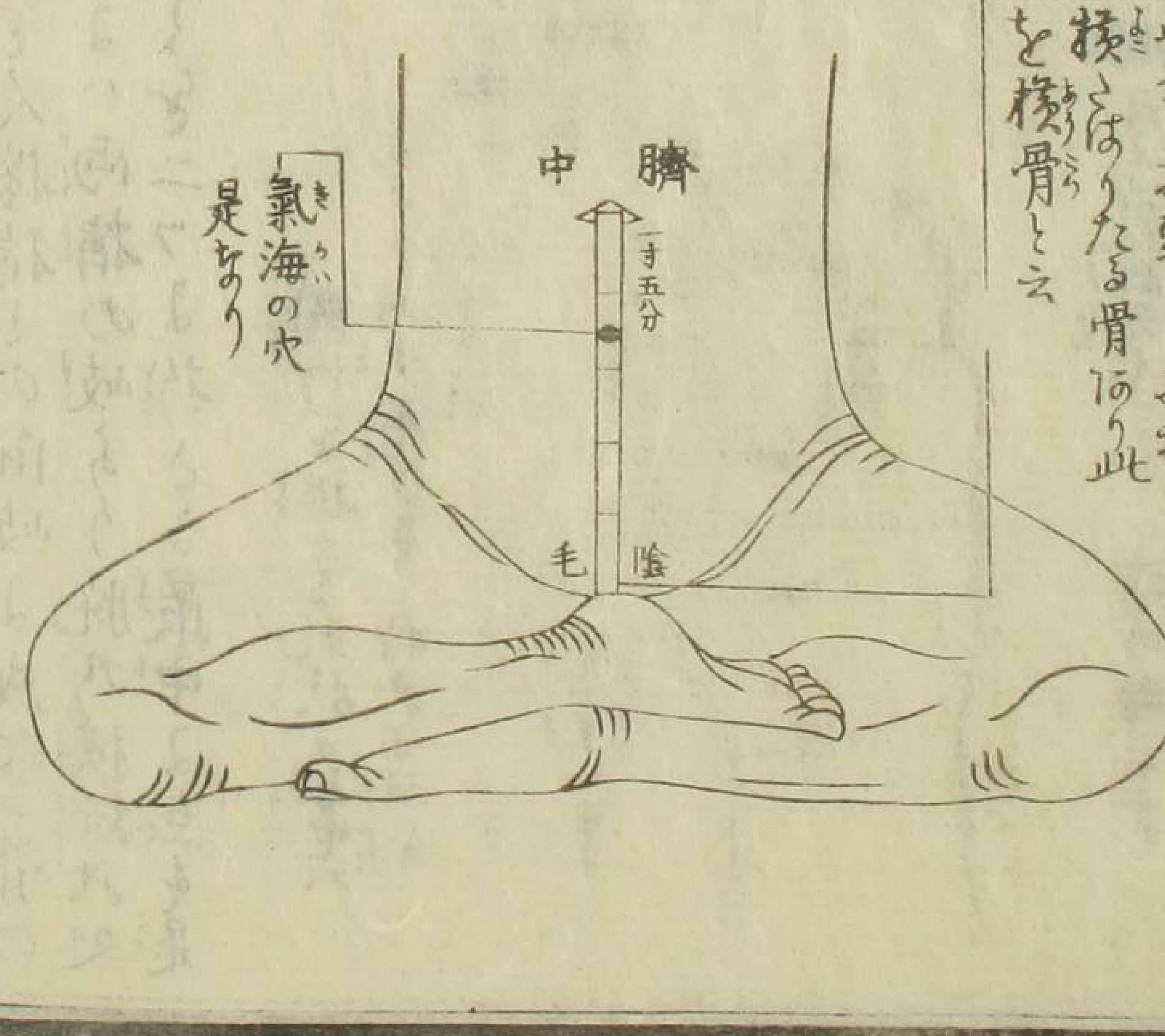
凡人ニ皮膚の色相内外同じからず此処も内外の際故赤と白とのさかいより此より量べし

圓竹を握たる形状になせバ此穴所ひきくなるを目的とし



氣海

此穴臍の下に在是を按乃法ハ臍れ最中より下横骨の上際までを藁にて度り此藁を五に折五すと定て臍より下一寸五分に点すべし横骨とハ陰毛の中指頭にて按バ横たはりたる骨あり此骨の上際よりもかるなり



大椎

大椎の穴ハ脊乃第一上れ脊骨の上に在此穴を按にハ此骨此上に小圓骨あり是を項骨と云三ツ見ゆる者あり二ツ見ゆる者あり一ツ見ゆる者あり一ツもみへざる者あり扨此骨三ツある人にても頭を動せバ項骨ハ随て動といへども大椎の骨ハ何様に首を動してもうごかず是大椎骨の證据なり

大椎骨ハ脊骨の最上のとまりにして下ル脊骨より大きなりと認べし

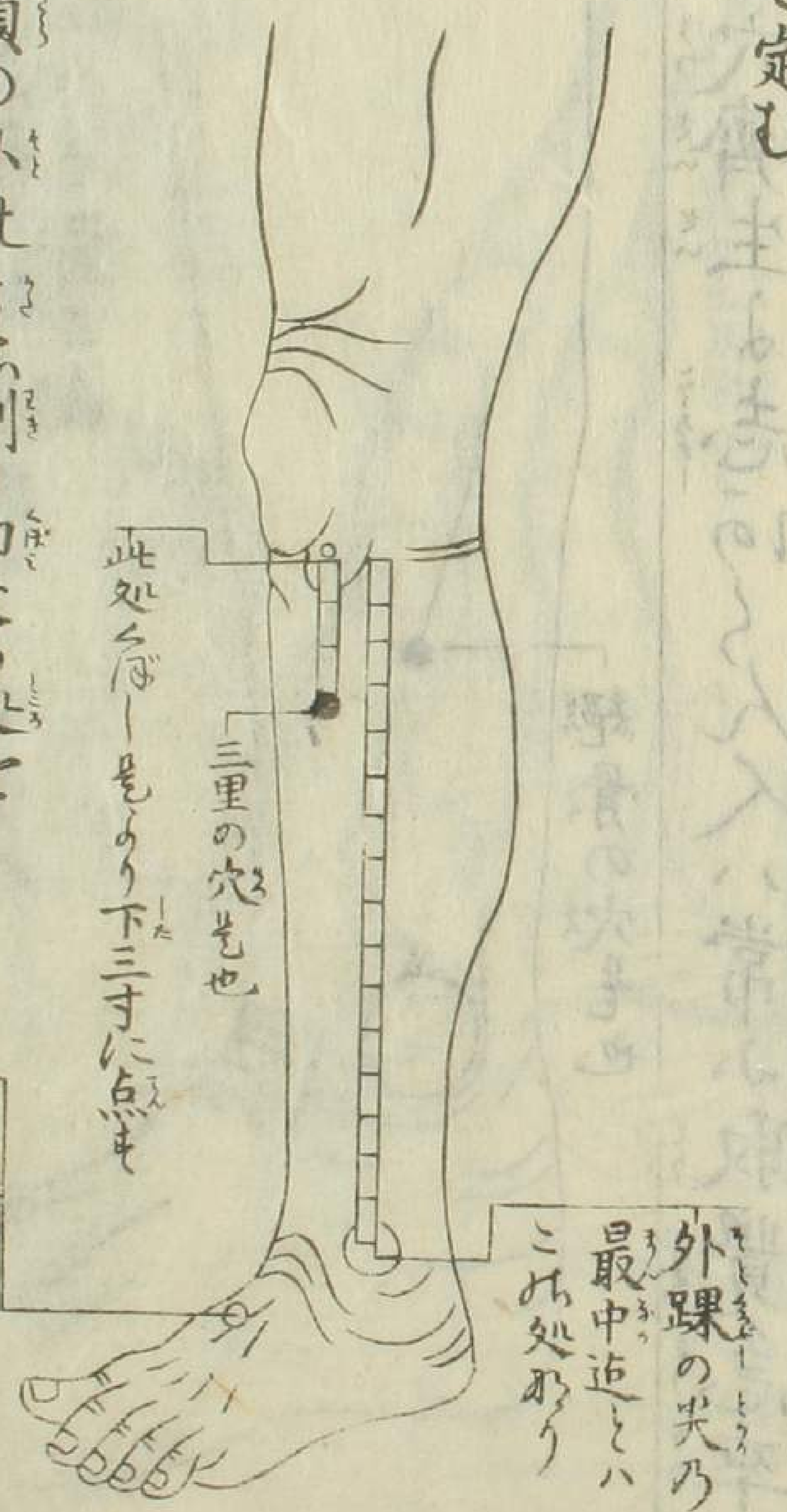
章門

ハ脇肋の季れ小肋骨乃端に在此穴を按にハ其人側臥させ上なる足を下になりたる足と伸上になし足を屈させバ肋骨あらはれて見易し扨肋骨の季の小肋骨乃端に假りに点すべし此点より前の方へ一寸五分に点じ是章門の穴なり○分寸を定るにハ腰乃囲四尺貳寸にして一寸とする法図説天樞乃條にあり

三里

此穴を按にハ先膝の後膕乃横紋の頭より外踝乃尖の最上までを藁にて量此藁を十六に折り六寸と定む

扨膝頭の外の方外側に凹たる処を膝眼と云此所の最中に假に点を付置き假点より下へ右の寸にて三寸に点し是穴なり



絶骨

此穴を取るハ膝膕横紋頭より外踝の
尖上まてを量て尺六寸として此寸ふ
く踝を除踝の上際より上れ方へ三寸に
点を亀し是穴なり
此処を按摸て視れバ図のごとく骨れ
解めあり足前ふ在

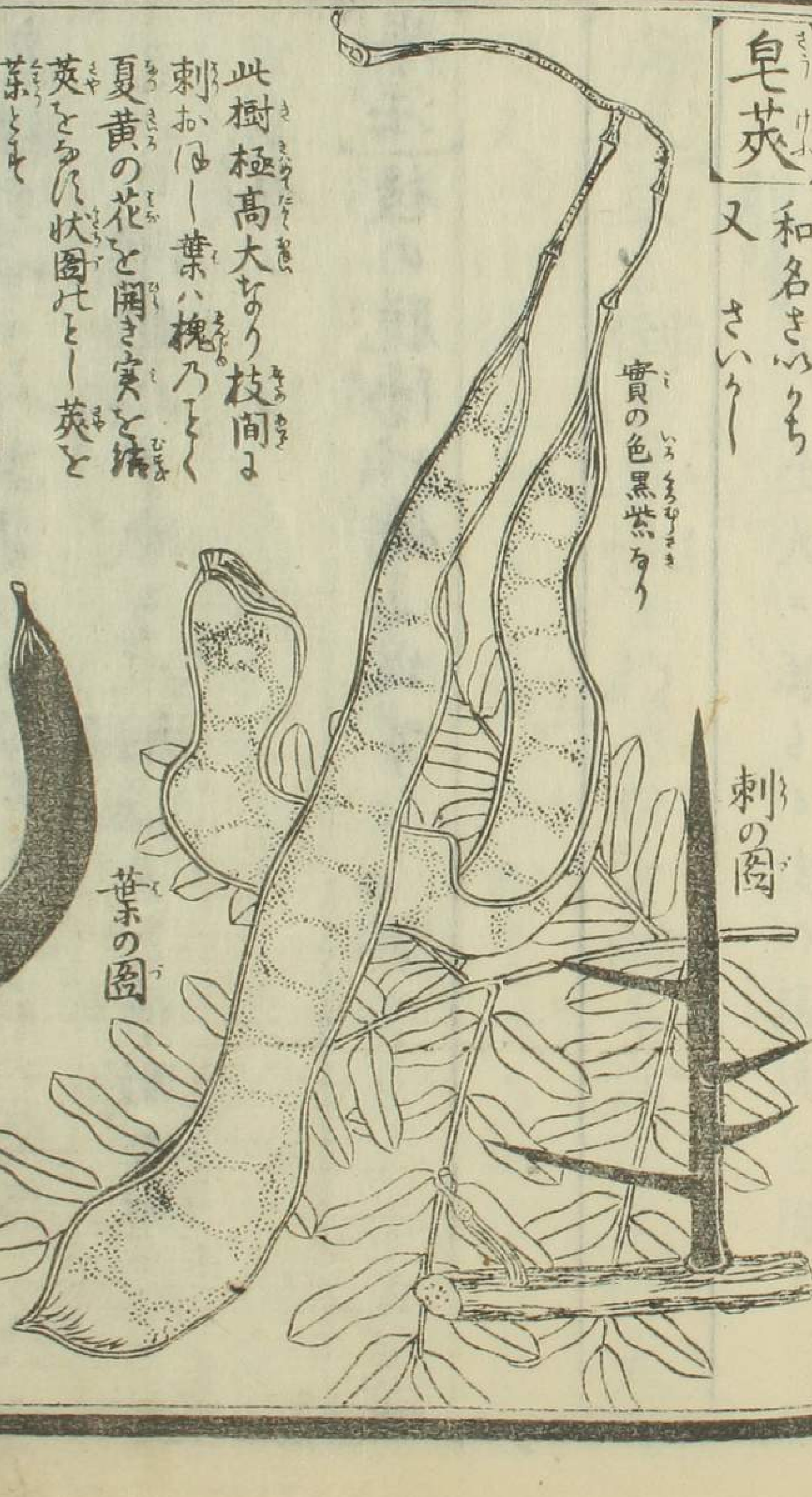
右灸穴濟生ふ志るせらん人ハ常ふ取覺急卒の
用ふ備置し以下諸穴皆志るせり

皂莢

又

和名さいかち
さいかし

此樹極高大なり枝間ふ
刺おほし葉ハ槐乃ごとく
夏黄の花を開き実を結
莢をなれ状図のごとし莢を
薬とす
又豬牙皂莢といふあり状
豬の牙乃如ふして小なり
氣味最厚し此邦ふ水し唐より渡る薬店ふあり



豬牙皂莢の図

脱證病状 凡人卒に倒れ奄忽人を志らズ痰潮喘息眼口ゆがみ半身かなはず是上前の閉證に比ぶバ口開眼合手撒遺尿証あるを中風の脱證とする也

療法 後の脱陽の條に出す

脱陽 大に吐大に瀉したる後の陽脱を附ス

病状 卒に倒れ無性になり口を開手ひろげ大便又ハ小便をもらし或ハ汗出て流るがごとく或ハ汗いでず惣身手足ともに温に目を合鼻息麁鼾の如く或ハ痰咽にぜりくとなへる音あり或ハ痰なき音なく或ハ面赤又ハうち黒く又ハ顔色粧がごとし是脱陽也

○凡霍亂等みて吐瀉やまズ又ハ夥しく吐瀉し

たる後元氣やもしくハ手足冷あがつてもひや汗出
て陰囊ちゞみ上り手足搐し面くろく息づかひ
せハしく或ハ手足乃筋引つまり漸〻に無性に
成ル者あり皆陽脱の候とす
○或ハ常〻喘息もちとて短氣つよく左の乳の
下の動氣つよき人遽に脱陽することおほし又
暴瀉後或ハ廁の内或ハ廁より出て卒に倒るゝ
ものあり是等皆脱陽なれバ療法皆同じ

療法 早速に神闕氣海關元に灸すること二三百壯
すべし大劑にして獨参湯を用ゆべし 人参貳匁 水中茶椀
に貳杯入一杯半に煎じ用ゆ 又臍中の穴に灸すべし 極隠白百
會人中絶骨章門風市等の諸穴 六穴ハ図説中風の出ス に灸
すべし痰強きハ参姜湯 人参壹匁生姜壹匁也 煎し様ハ獨参湯同じ 四支
厥冷にハ参附湯 人参一銭附子一銭 煎服汗多出バ人参黄
芪各五分を煎服或ハ芪附湯 附子黄芪各一匁 煎し服す ○
又方 桂枝 薬店にあり買求べし すこし両剉ミ好酒にてせんじ

飲しむ可し若桂枝も無きときハ葱の白根五六
廿本許を剉て好酒にて濃せんじ飲しめてよし
或ハ生姜を擦く一両を清酒にて煎じ用ゆ又
効あり

吐瀉の後

脱陽の証嘔氣やまずして藥も受ざる者あ
り此証にも半夏を加へ附子を加へ煎じ服すべし嘔
氣やみて後参附湯又汗おほきハ芪附湯の類を
用ゆべし且氣海天樞中脘に多く灸して其上に

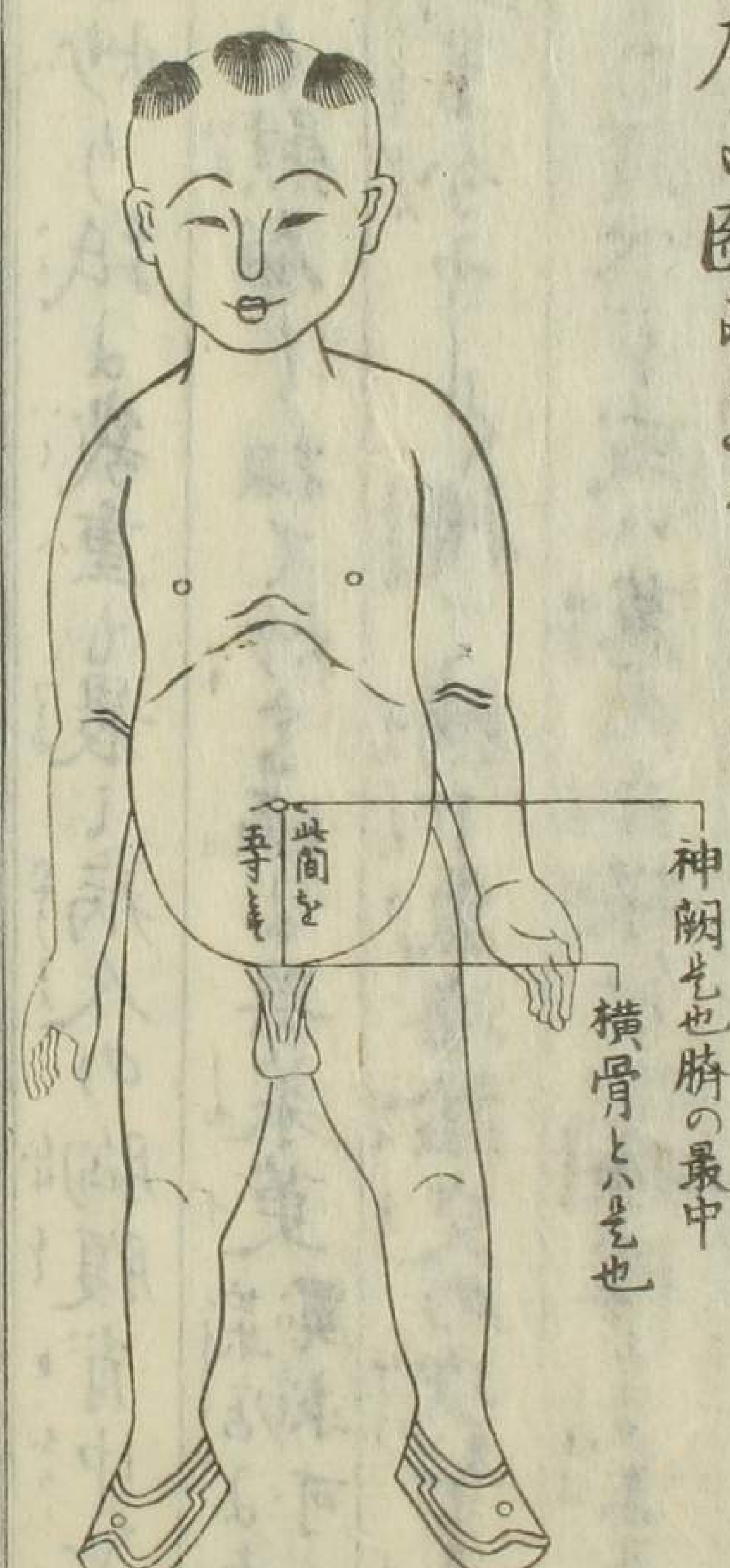
塩を炒り紙に幾重も裹て病人の胸腹背中を絶
間なく熨廻し扨て炒たる塩に呉茱萸（薬店にあり買求可し）
を剉等分にして攪て臍下氣海陰交の次を是又
絶ずのすべし或ハ葱の白根を一握ほど索にて
志ばりて其根と葉とを切捨て其切口を烈火
にて燃し熱なるものを病人の臍下に着置き其上
より火熨にて火を盛り熨すべし

神闕

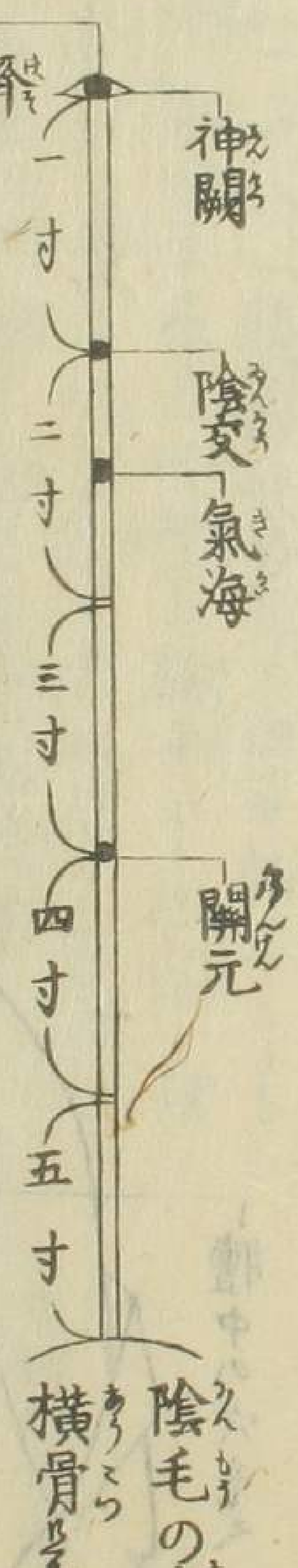
の穴ハ臍乃最中に在

氣海　陰交　關元

の三穴ハ臍の下小腹の中行に在是を揆の法ハ先寸を定べし其法陰毛の中陰器の上に横ゐはりたる骨あり此骨の上際より臍乃最中までを藁にて量取此藁を五つに折く五寸と定め此寸にて臍の最中より下へ一寸を陰交の穴とし亦一寸五分を氣海の穴とし亦臍より三寸下を關元の穴とす左の圖あるがごとし



藁にて度たる圖也



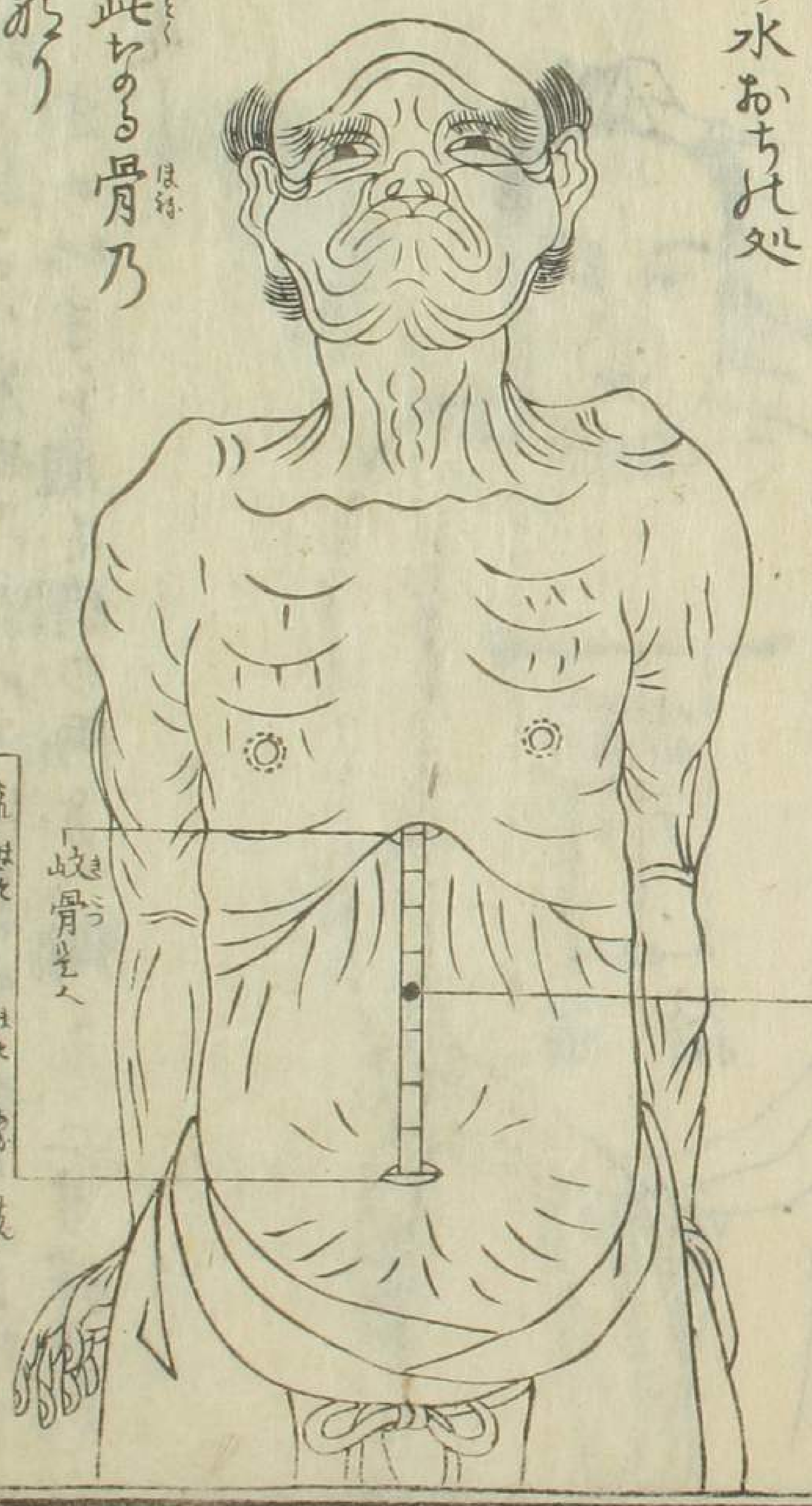
膻中

此穴処ハ両の乳乃最中に在圖のごとし男子ハ知易し女子ハ乳房大く垂て分別がたし圖説を後に載す考揆て灸すべし

婦人の膻中れ穴を採よハ嗌乃結喉俗よ云の下胸の上乃最中よ一如此状の骨あり其骨れ上よ凹処あり此処より下臍の最中までを藁みて量り此藁を十七よ折き尺七寸として此寸を用く右嗌と胸とれ間凹ある処より下へ六寸八分よ点すべし是膻中の穴なり

中脘

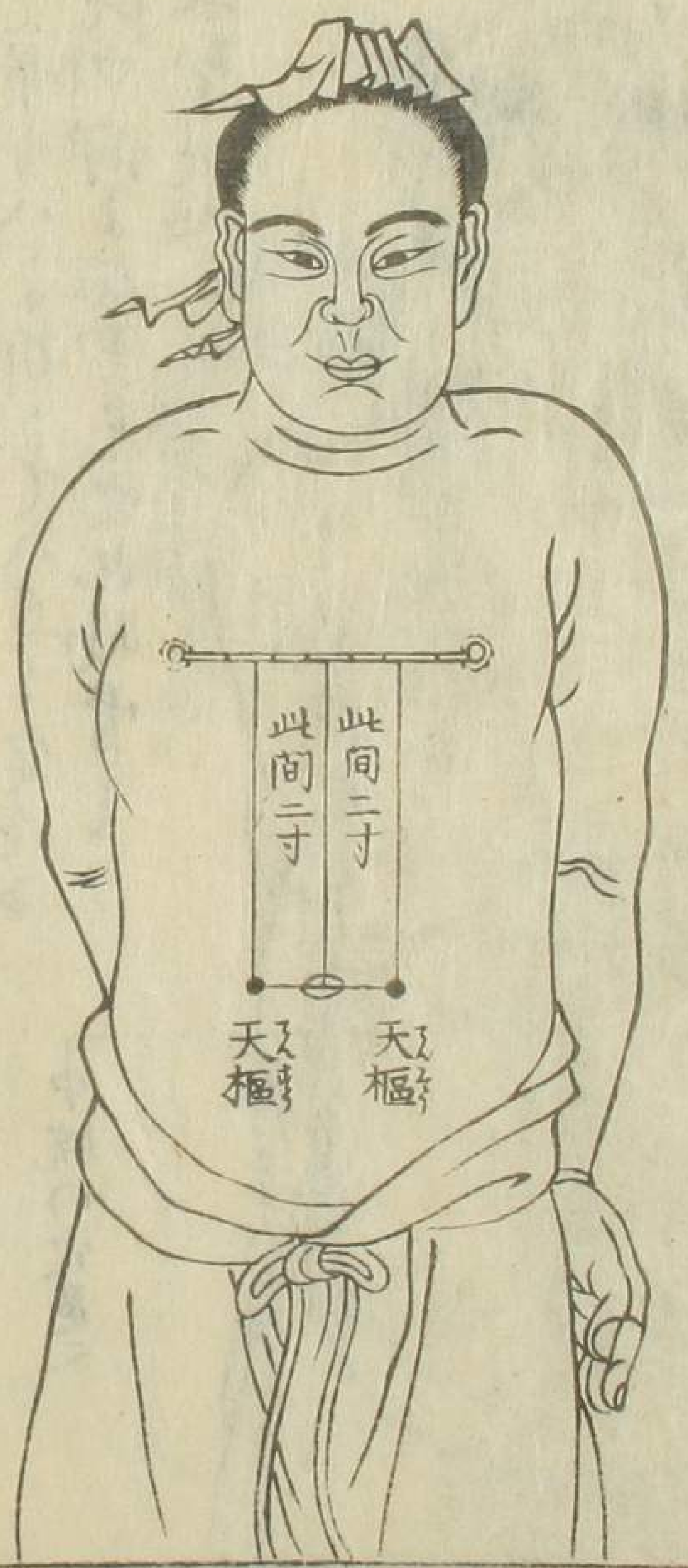
の穴ハ膻前岐骨の下四寸臍上よりも四寸よ在り岐骨と臍中とれ間を藁みて量り八つよ折りて八寸と定たる寸法れ中間よ点を是穴也岐骨とハ膻の水おちれ処へ如此なる骨乃事なり



天樞

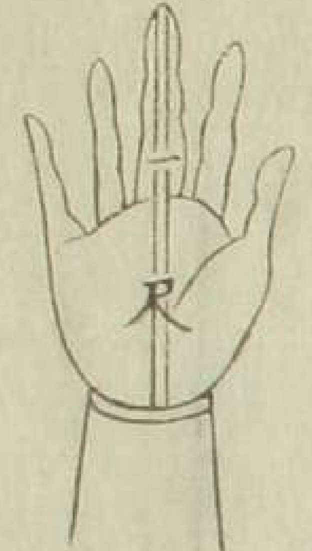
此穴ハ臍の両傍に在
此穴を取にハ先両乃乳の間を藁にて量り八に折て八寸と定め此寸を用て臍の両方へ開こと二寸ほどに点すべし

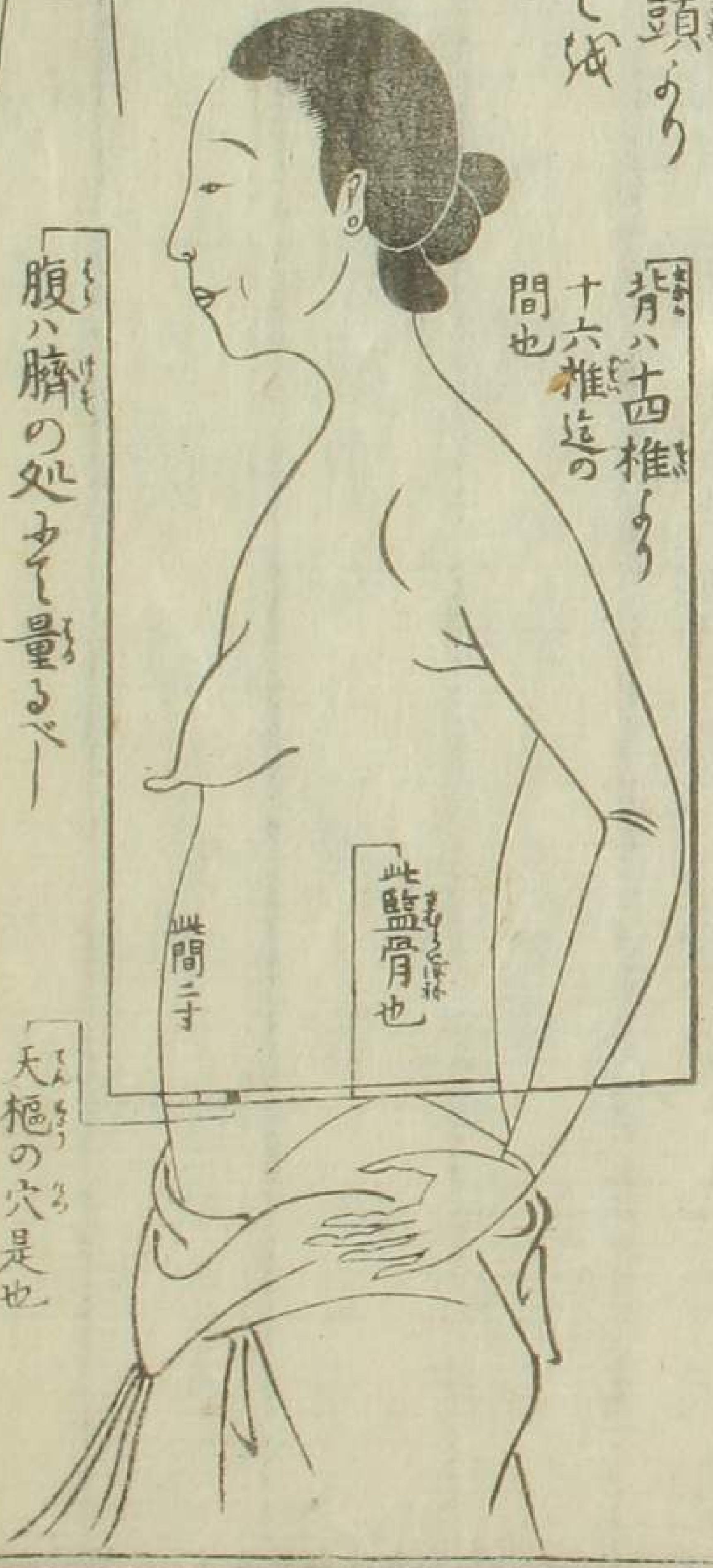
婦人ハ乳房大く垂て準となしがたし別に挨法ありて左に出せり



婦人の天樞れ穴を挨にハ腰の圍にて取べし先法前ハ臍側ハ監骨乃うへ背ハ十四椎より十六椎までの間にくゝく平直なる処にて縄をぐるりと引繞ひく剪断此縄を四尺弐寸と定此寸にて臍の最中より両方へ二寸ヅヽ開て点ずべし是天樞の穴なり

若婦人腰を見難きときハ中指の頭より腕の約紋まで然一尺として此寸を用べし尤病人手にて量るべし





交接昏迷 男子交合の時氣ぬけしのふさがりに走陽とて交合の時精をもれやまずしてを附れ

病状 男子媾合過度婦人の身に上りて氣ぬけしのふことありて住て死する者あり

療法 婦人其侭緊と抱住て息をもと男子の口中へ嘘込てやめざるときハ少頃して自省て身を開き若シ婦人驚き手を放せバ必死そ不可救 省後食塩を炒熱し布か紙に包先氣海 臍下一寸五分関前にあり を熨し参附湯 人参附子を文ほど煎じ用 を煎じ灌ぎ服しむべし

走陽 久曠の男子又ハ縱慾れ人女子と交合し精泄出て止ざるなり救ざれバこのあゝくして死ぞ早く理法を施すへし

療法 其婦人緊と抱定て其陰莖を陰戸より出さしめ動かさしめ其侭にて婦人の息を男子れ口中へ呵入てやめし且會陰 陰嚢と肛門との間の最中なり を指にて緊と捻住て放さず亟かにして精自止を以後亟よか又童女に命て息を口中へ斷ず呵込せ被て獨

参湯 人参貳匁水を茶碗に二杯入一杯半に煎じ用ゆ を灌のませてよし

○婦人氣を吹て男子れ口中へ吹込にハ口をすぼめて吹ぞ冷し氣出て何しく口をすばめ吹込亟し假令冬月寒氣にあれ節凍るにて氣吹うけて何らくむるがごとく呵いと吹べし

○此法方を志らずして婦人驚愕て身を離き手を放或ハ心にくで療理おくれて死を遂る人あり凡人の妻妾にハ此法方あるを説話しせておくべきことなり多慾なる人にもあるまじきもいらぐるれでなり○右交接昏迷と走陽の二證ハ倶に原脱陽に属すと然れども理法不仝故別に表章し

中氣

病状 卒に気絶うしなひ歯をくひしばり目をにらみ詰め且ハ身冷て咽に痰の聲なし

此証大抵中風の閉證と同しけれバ前に中風の条と合せみるべし然しながら中風ハ身温也中氣ハ身冷し脈も又中風ハ浮也中氣ハ沈也

大抵此證の起る前に心気を労し又ハ大きに怒事あり或ハ怒をこらへ又ハ思案すること

よりて氣の鬱し時に發する證あり元皆七情の過極りたるより起る世に中氣中風を一ツに心得たる人多し初ハ大抵理法も似たる様なれども後に至りてハ大に同じからず

療法 先初に鼻に胡椒の末又ハ烟草の粉など吹込嚔をさせ後に酢を火盆の内へ傾け入きて酢の氣を病人に嗅せ且隱白に（図読中風にあり）湧泉に（図読霍乱にあり）の次に灸してよし生姜の絞り汁を湯にて拌飲てよし○又方木香（薬店にあり）を多く煎じて飲しむべし○又方香附子の末を多く辰砂（薬店にあり水飛ハ雑物あり）（薬店にあり）砂利又ハ大々と云ものなど新たに研細末となして用をよしとれ 五分白湯にて服さすべし

痰厥 此條ハ中風痰壅の証と参へ考べし理法も畧同し

病状 此病ハ中氣と同じ惟初に眩暈ありて卒倒し聲いでず咽に痰の聲ありて潮の湧がごとく咽にせまり歯をくひしめ目ばつみ息麁し

此證と中風にハ痰の聲あり中氣の證にハ痰乃聲なし

療法 先搐鼻藥方ハ中風に見へたりを用て嚏を取べし

其次に塩湯に生姜のしぼり汁を入まぜて用ゆべし

よろし竹瀝を加るもよろし 竹瀝取様中風に出す 又甘草一

味剉く濃煎じ多く飲しむべし痰を吐て愈ものあり○又方半夏茯苓二味 生薬店にあり 等分に煎じ服す○又方白礬 薬店にあり を末とし生姜の自然汁にて調へ服すべし○又方大なる半夏 薬店にあり 十四粒皂莢 説中風に出ス 薬店にもあり 図一條剉て水二鐘入て一鐘に煎し生姜汁を入温め服すべし○又方香油一盞を喉中へ灌入へし須臾に痰涎を逐出して愈

中暑 暑に中り斃 倒るあり

病状頭痛大熱ありて身を灼て見るに肌膚焰がごとく大いに渇き水を飲とし汗甚しく泄出て漸々に無性に成るに至るも喘満熱をいやのるなり

凡暑気中と称る病に二つあり人暑を避として涼処に露坐又は夜臥失覆して陰寒をうけ或ハ身ハ陽気暢越ことを妨くして病を得るあり古の人是を中暑と云至る証大抵頭痛悪

寒肢節疼痛心煩汗出ることあらし若此證ふし
て吐瀉腹痛甚しけれハ即霍乱なり各療法同し
このごとく此條に記せるハ炎天を侵して往来し
又ハ農夫等日中ニ労役して天熱に中り気を
閉塞たるを救方を載たりおよそ中暑とハ
病因療法過に異なり混合すへからず 暑を避
ざるハ固り緩病なり故に此に載ず 霍乱も
急証なりといへども別條ニ記しおけり
療法 凡天の炎熱に傷されたる人に冷気をあてゝ冷

水等をのましめあたふれバ必ず死す炎
熱の毒外へ漏出る事ならざる由なり急日
陰の所へ臥しめ途中道傍の熱土塊を堀り取く
だき病人のむね又ハ臍の上に積ミ最中ニ
窩を作り其中へ他人をして多く小便をさせ
て熱気を透しむ可し ○又衣類或ハ手拭等に
物を熱湯の中へ醮し臍或ハ気海の邊を慰し追
追熱湯をときどきに淋かけて漸々に醒べし若湯な

起ときハ道傍なる熱土を掬ひ臍の上に積置き冷
れバ取換へく幾度も熨すべし○又方既に死んと
するハ新汲水少し鼻の孔へ入て扇にてあふく
但し至極重き病人ならバ日なたあつき地
を一尺あまりほりて其中へ水を入く攪し其水
が鼻の孔へ入但し少にても惟水をくハのま
しむべからず
服薬 大蒜一大瓣を嚼ミ水に送り下す若嚼こと

叶ざらんバ水にて研汁を灌ぎ飲しめてよし○
又方急に生姜一大塊を嚼爛し冷水にて送下
べし○又方食蓼（食料にするものなり）茎葉共にこく煮て其
汁を灌飲しむべし○又方大蒜多少にかゝハらず
研砕道傍の熱土を取り一所に水にひたして置
上なるすみたる水を灌飲しむべし○又方或ハ肚
痛忍がたく或ハ行人倒臥て道上にたへたるに藕を
搗汁を取灌下すべし

入井悶冒

井ニ入て悪き氣ニ中り昏倒するなり

春夏の際或ハ夏秋乃間窖中眢井の中皆陰毒の
氣あり又山中深谷の間或ハ金銀銅坑の中往ゝ
震氣蒸騰す若人此氣に中るときハ悶絶する事
あり久不省にて救ハざれバ死ます
凡春夏ゟ秋の際窖中眢井久しく蓋仕込たる
井戸ニ入らんとする時ハ燈火を入見るべし
火消バ毒ありと入べからず又鳥の毛をとさ内に

投いれたるに直ニ下へ落るハ毒氣なし若其毛旋舞て降らざるハ毒氣あり入べからず若入ねバならぬ事あらバ酒或ハ醋数升を井ニても窖ニてもと四邊の畔へそゝぎかけ少し停て入るべし又醋を熱く沸て右のごとく灑ぎ入るもよしとぞ

療法 若し其氣に中らバ速ニ其井中の水を汲ミて其面ニ洒ぎかけ且其水を飲しめ亦頭及び惣身へ灌かけてよし○又方他の井の水を汲ミ惣身へ洒のけ置ハおのづから醒るなり○又法急ニ病人の衣類を解裸体にし扶て濕氣ある地面の土間ニ偃臥せしめ釅醋或ハ冷水を其面ニ噴け濕氣ある草薦を厚く覆ひかけ凡そ半時許にして甦るなり○又法先冷水を取て其面ニ噀のけ次ニ雄黄（菜店ニあり用てもつともよし 鷄冠石ハ雄黄の上品なり）末を一二匁冷水ニ白のませてよし　此證轉筋め

其上腹痛甚しき者なり男子四人を揃に病人の手足をとらへて捉住動ぬ様にして天樞と穴圖説中風の右の方ぞうりに灸し生姜を二両剉よあり酒にて濃く煎じ頓にのますべし又衣類にても綿絮にても酢にてよく煮て熱くなりたるときは手にても足にても轉筋ある所を濕し裹み又濃き塩湯に病人の手足を浸し胸と脇との邊を薫洗てよし

食厥

食滞して卒に倒るゝなり

病状 卒に眩暈して仆れ口噤て手足動かず或ハ手足躁擾满悶く漸に昏冒して無性となる全く中風の閉証のごとくなれども口目ゆがむることなく痰の聲なし但腹を按してみるに心下をりて下腹空軟にして右の天樞の邊或ハ中脘の次に塊ありてこれを按バ顔を顰いたみある様子にみえて兎角に胸の中が苦むていふなり

凡中風中氣等の証にも心下痞滿て邪物ある証あり故に古方に多く吐方を用ひたり此證も心下痞滿して吐あれバよしとす皆閉證なれハなり虚證にも又卒倒する初に心下痞滿者あれども漸々に空輭になり空輭なるに隨ひてまた昏冒なる也閉證は痞滿ハ吐ざる内ハ輭ならざる物を吐きて後漸々に輭に成空輭になるに隨て稍々と氣もたしかに成

べし若此分別をせざれバ妄に食厥として理法を施さば其害あしかるなり故に卒倒の病者あらバ食前食後の時刻を考へ尚知得がたくハ傍人にも問求めて食後なるか又ハ前日にも大食せしことありや否を聞心下并に中脘天樞二穴脫陽ニ出スともにの次をおしてみるに痞滞塊積あらバ食厥と知るべし

療法 急に閉噤法中風の條に出ス歯をとつくくちを

開き濃せんじたる塩湯に生姜の絞汁を入ぬる
ま湯にしてあくのませなばそのちへに鳥の毛
又ハ紙撚にて咽を探り吐すべし○又方藍汁か糠
味噌のうハ水をぬるま湯に沸して飲しむべし吐
くことなくば○吐て後紫蘇葉煎じ服すに生姜を入
煎じ服すも亦可○又方藿香 生薬店にあり 陳皮 蜜柑乃皮を用べし
九年母の皮なし 二味薬店にもあり 等分煎服すを最よし
○此證最鍼刺をよしとす

驚怖卒死 もはなをどろきて めをまはしたなり
凡人夕暮又ハ夜中圊に登或ハ郊野へいで或ハ
空冷屋室に遊び又ハ志くひさる所の地より忽異
形の物をとみて口鼻の内へ邪悪乃氣を吸入驀然
地に倒れ手足厥冷両手を握り面色青黒或ハ口
鼻より清血を流す事あり
凡卒に倒れて無性になし病人ハ聲をたつるを
あわ着あり惟小児の驚風並に大人の癲癇驚

怖して氣絶すると也三説は叫聲をあぐる也

是は其説に據るべし

療法 病人を外へ移し動かすべからず不に時て親戚衆人圍繞く火を焚き安息香麝香（薬店にあり）の類香ある薬を焼き人々覺少く出るを待て動かすべし先急に半夏の末を鼻孔中へ管にて吹込或ハ皂莢（猪牙皂莢よし薬店にあり無きときは常の皂莢にてもよし図説中風にあり）の末両鼻中に吹入るよし

服藥 雄黄（薬店にあり）を姜汁醇酒等にて攪ぜ煎じ沸こと数度にして飲しむべし○又方麝香五分研て醋一合に和匀てのませてよし○又方韮汁を取りて口鼻へ灌入る○又方菖蒲（石菖の根之人家に多く栽ものなり）搗て汁を取りそゝぎ飲しむ○又方温酒を灌入てよし○又方醋少許を病人の鼻中へ吹入それうくに水分の穴（図霍亂にいだす）に灸する事七壮陰交の穴（図脱陽にあり）に灸するも三壮なるべし○又方辰

石砂の末なり薬店に熊膽鑑定の法積氣暈倒に出ス五分ッゝ白湯に
解きまぜ用ゆ辰砂一味にてもよし

霍亂

此病乾濕の二ッなり濕霍亂ハ吐瀉して腹痛甚しきあり乾霍乱ハ吐もせず瀉もせず惟心腹纒繞大に苦悶を云なり何れも危急なる證にて種々の變化一條に載がたし療法も亦變化なり
今十中れ二三を記ものと

濕霍亂病状

病發に頭痛痃瘒なる者なり又頭痛痃瘒なく初より先吐して後に瀉者あり先瀉して後に吐するあり吐瀉の前より腹痛甚しきあり吐瀉ありて後小腹痛甚しきあり何れも腹中疞痛まぢるハなし極吐して吐盡まづ瀉して瀉

至りて或ハ吐瀉ともに至らず湯も薬も口に入
らず或ハ口乾て水を飲んとし或ハ悪寒甚しく
或ハ熱を發し喘急しく手足共に厥冷戦掉軽き
ハ両脚轉筋重きハ惣身諸筋冷汗出唇舌動かず
漸く小昏倦なるなり

療法 忽然心腹疞痛て吐瀉せるハ先塩を炒熱し
或ハ熱灰又ハ糠或ハ塩を炒紙に裹心腹并に臍
下気海脊の十一椎十二椎の次と腰を熨べし

めてよし又ハ生姜を擦り汁を絞り去て滓を炒
熱し紙に裹て右の所を熨すべし又ハ食蓼 食料にて
るとのなりを多くあつき湯の中へ揉入て腰湯をせ
るもよしとぞ

服薬 胡椒十四五粒嚼て白湯にて飲下せバ又ハ
研て菉豆等分に加へ煎じ服す○又方呉茱萸乾
姜二味等分に煎じ服さしむ 二味共に薬店にあり ○又方
扁豆香薷 二味薬店にあり 各等分水に煎じ服すべし

嘔吐幷ニ乾嘔不已 ハ半夏（薬店にあり）一味煎じ生姜の絞り汁を入服す前の呉茱萸乾姜の二味もよし且中脘に灸すべし（中脘の穴図説中風にあり）間使の穴（図説後にあり）に灸するもよろし○又方小蒜（図説下巻諸物入耳にあり）煮て汁を服し臍中に七壮灸すれ○又方手足冷るハ生半夏一匁生附子一匁（二味薬店にあり）生姜三片水二杯ニ一杯半に煎じ用ゆ○又方芥子擣て末とし糊にまぜ紙に攤臍中に貼べし吐不已ハ巨

闕の穴に灸すべし唬やまざるハ大陵の穴に灸すべし（二穴共に図下にあり）熨薬の方ハ前におなじ

下利不已 ハ天樞幷ニ大都に灸すべし（二穴とも図後にあり）吐下止ずして手足厥冷元気ほどなく冷汗出て煩悶してその云べからず無性にならんとするハ参附湯（人参一匁附子一匁剉て煎じ服す）姜附湯（乾姜壹匁附子壹匁煎じ服す）又ハ附子を煎じ塩一撮を入れ攪て服すべし○又方桂枝（薬店にあり）壹両剉て好酒に煎服す

○又方連鬚葱白七莖酒にて濃煎じ服するか或ハ白
凢薬店にあり一匁沸湯に拌用ゆ○氣海 圖説中風の條に出
小灸する事数十壮するか熨薬も前法によるべし

吐利不已ハ建里の穴水分の穴承筋の穴承山乃
穴に灸すべし 四穴圖後にあり ○臍を透て痛ハ關元の
穴に灸すへし 圖中風の部に出ス 服薬ハ前の姜附湯
参附湯の類を用てよし

已死腹中猶有暖氣ハ臍中に塩を塡て其上に灸
すべし或ハ氣海の穴倶に數百壮又効なきハ先大椎
圖中風にあり 小灸し尚又承筋に灸すべし 又灸穴あり下に圖も

手足轉筋ハ塩を臍中に塡て其上に灸すべし○
轉筋する所ハ王瓜 後に圖説あり の實を搗碎又ハ食蓼
食料にするそのなり を木綿に包み湯にひたして痛む所へ
揉むし又まをつけくりかへしひてよし○又方大蒜
を研泥の様になして足のうらの土ふまずに貼付
べし○服薬ハ前に同じ湧泉の穴又ハ外踝の尖

此上七壮又ハ大指の爪甲際又ハ大指の本節乃上に灸すべし 何れも詳に後に図を出せり

吐下後渇 湯水を飲んとするハ粳米を水に入れ研くし生汁を温め中へ竹瀝 竹瀝ハ中風にあり を取る法と姜汁を入攪てのませてよし 粟黍の類何も水に煮て汁を取服さしむべし又糯米泔温服すべし

吐瀉後 凡癨亂吐瀉ともに止る時早く粒食ふべからず假令稀粥と云とも一呷も咽に入れバ立どころに死す吐瀉やみて半日許過て饑を生し然るとき粥清を飲しめ後に稀粥を少々与へ漸々て消息て軟飯を与ふべし熱湯熱酒を飲こと堅く忌用なり病家の人ハ病人に飲食を勧ることのなれども病にもよるべし霍亂後早く飲食を勧て大成害になりし者おほし慎べし

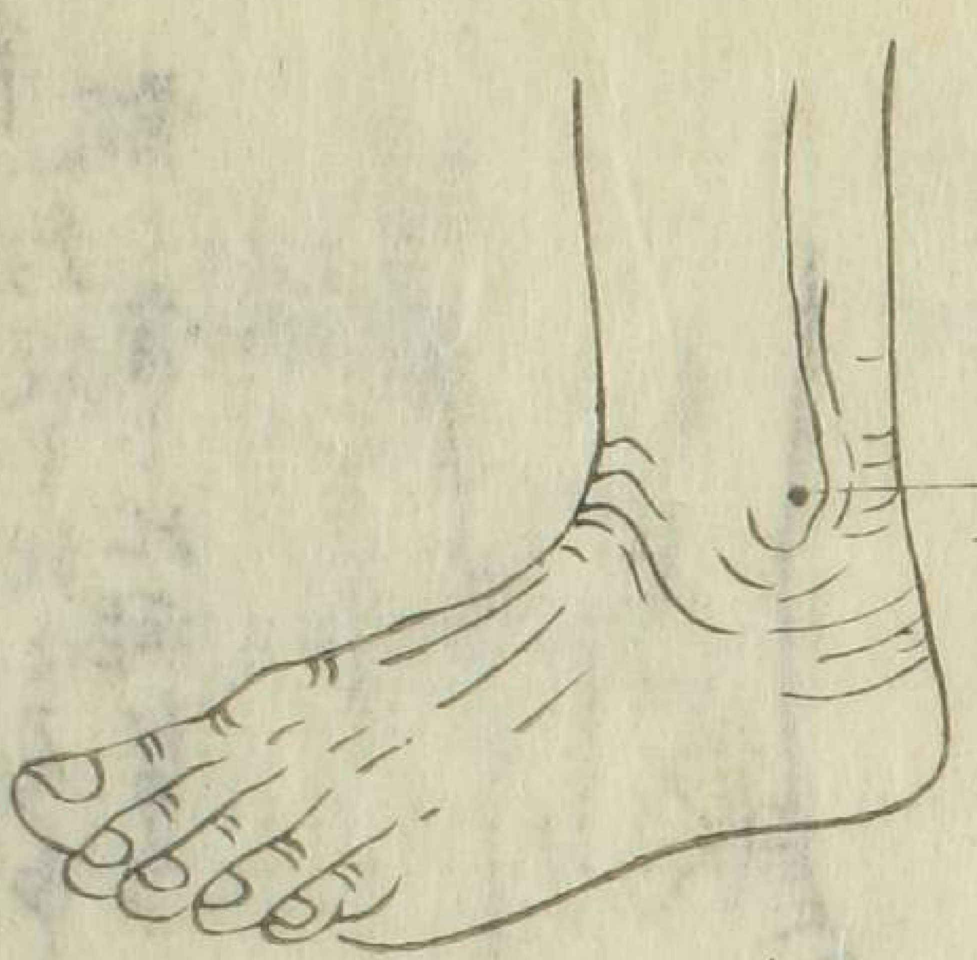
大陵 間使 倶に掌後に在大陵ハ掌後と腕との間約紋の最中にあり此処に縦に二筋のすじあり其間に点すべし間使ハ大陵の後三寸に点すべし両筋の最中に取べし扱此寸ハ直に大陵の次より肘の約文までを

量り十二半に折て是尺二寸五分と定る三寸を用ゆべし

外踝尖上の穴ハ外踝乃最中尖たる処に点してよし

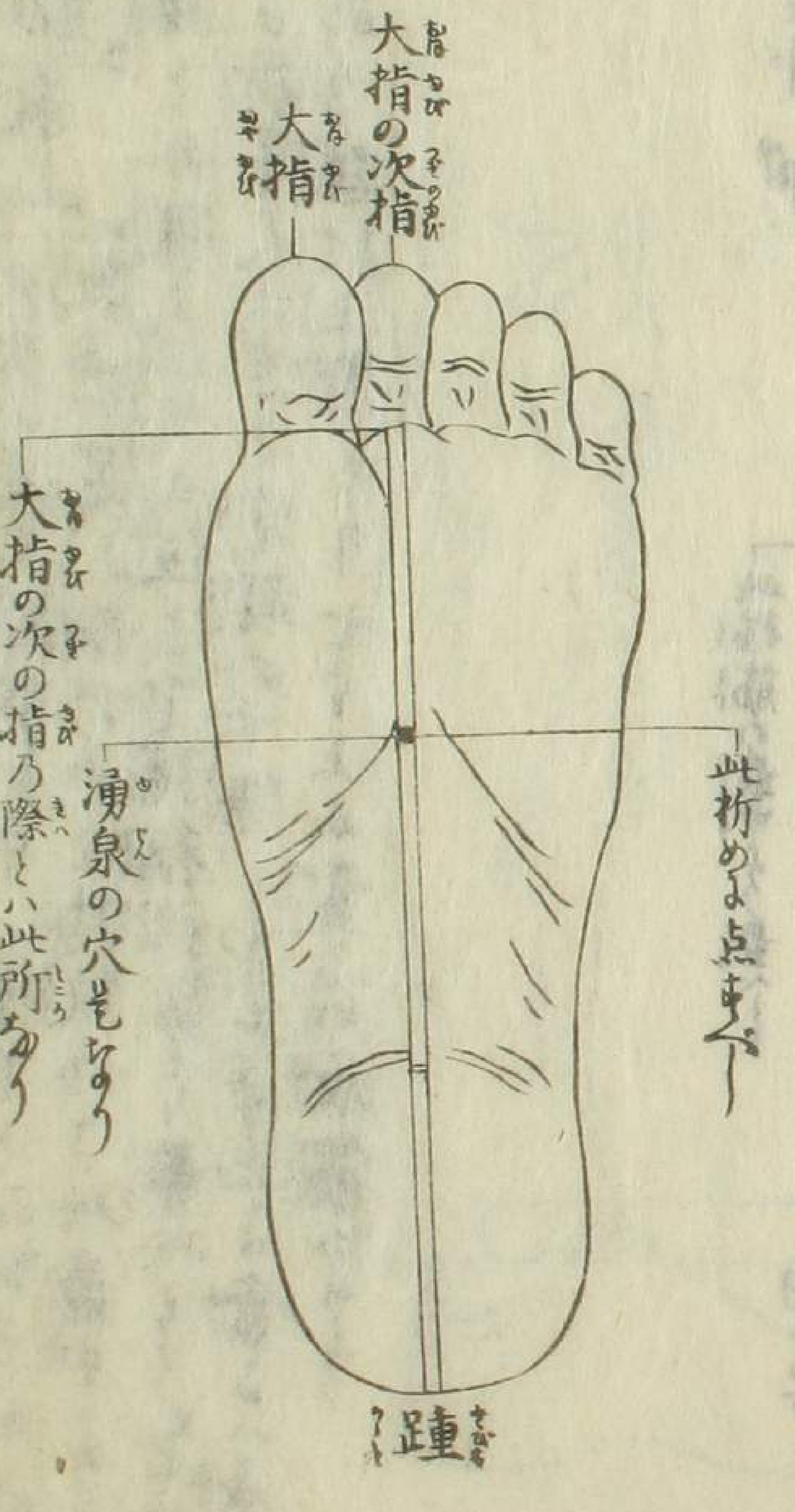
足大趾爪甲際の穴ハ足乃大指の爪甲と肉との間に点すべし
肉とハ爪のきハの肉なり

足の大指の本節の穴ハ足乃大指のつけぎハのふしの処に太き筋あり此処に点すべし

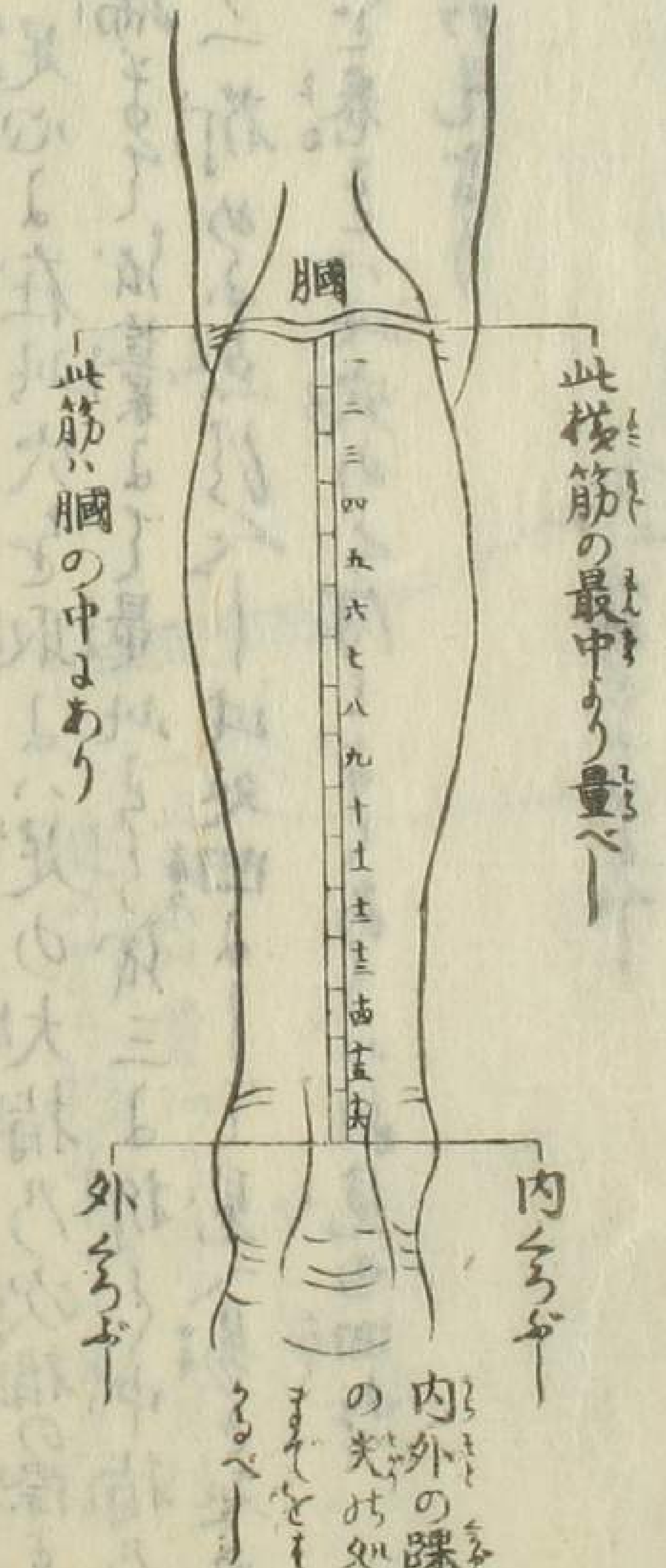


大都の穴ハ足乃大指の内の方栂のはけ根指を局むときハ約紋を作ところあるを其約紋の止りに点すべし此処骨と骨との間なり

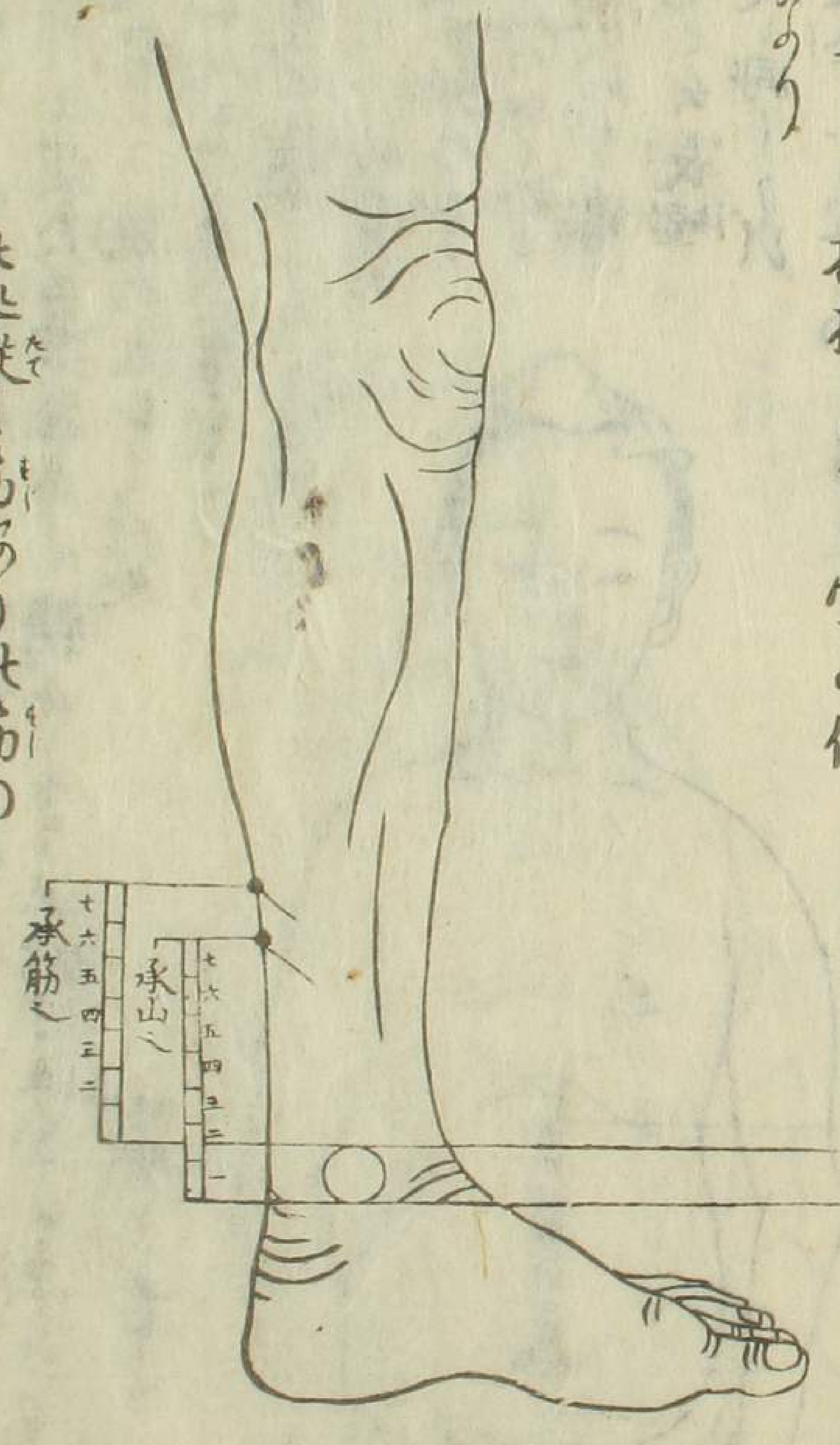
湧泉の穴ハ足心に在此穴を取にハ足の大指乃次指の際より踵の端まで紙の蔓にて量り此を紙三に折く中指乃方上より一折めに点つくべし此処凹にして見へ易き処也足の指を巻きバ此穴のくぼミよくあらハれ見ゆ凹の正中此所なり



承筋 承山の穴ハ足の腨腸の中と上下とにあり此穴を取にハ足の膕乃中の約紋より此最中より内踝と外踝との尖の位まで紙稲稈にて量此を十六に折さき尺六寸と定踝の下際より七寸上に當るハ承山なり踝の上際より七寸上に當るハ承筋なり

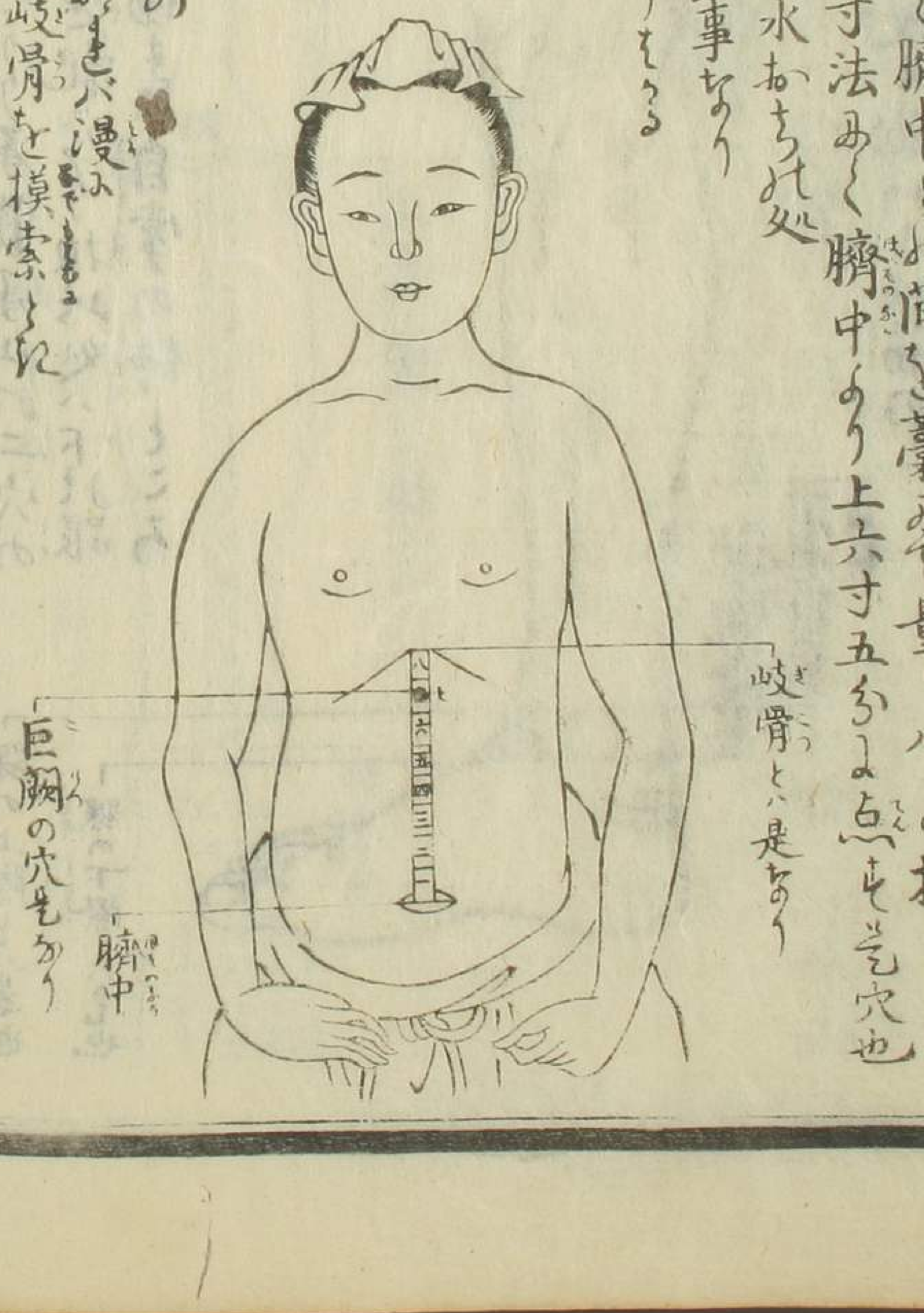


此図ハ脚の側より承筋承山の二穴の肉相の様子を記たり扨此処ハ下の跟の方より撫揚れバ自掌の停ところなり



巨闕

の穴ハ臆前岐骨乃下一寸五分臍上より六寸五分の所に在り岐骨と臍中との間を藁にて量り八ッに折りく八寸と定たる寸法にて臍中より上六寸五分に点をすえ穴也
岐骨とハ臆の水おちの処へ如此なる骨の事なり此骨の最中よりはかるべし ○岐骨の間巨闕の上に此の如くなる小骨あり鳩尾と云長短人々同しからず又全くなきものもあり脆き骨なれバ漫に重按をもて岐骨を摸索すれバ心ろ悪あるべし

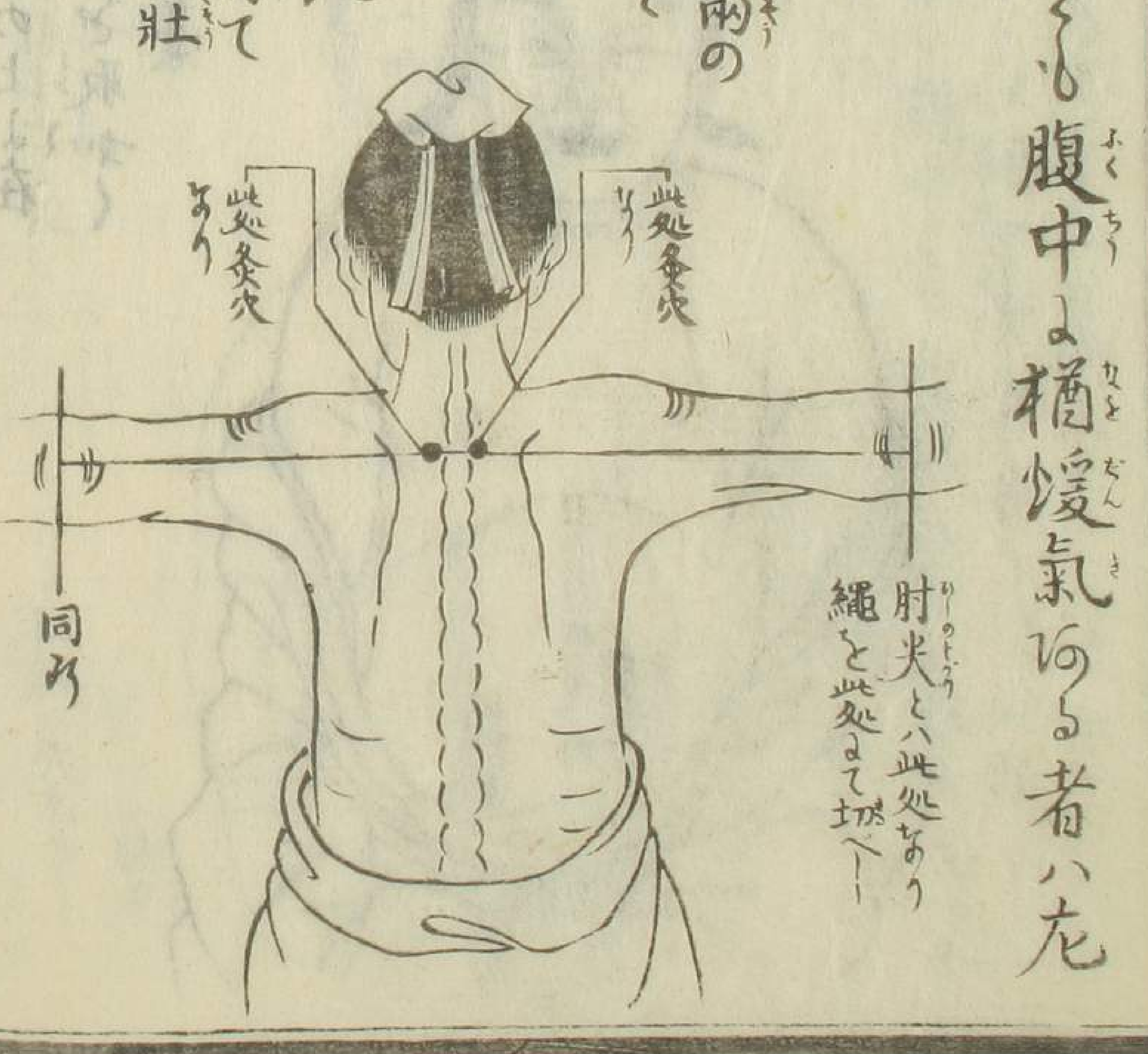


水分 建里

此二穴ハ臍の上に在前の巨闕を取如く岐骨と臍との間を藁にて量り八ッに折八寸と定なる寸を用ひ臍上一寸が水分の穴なれ又臍上三寸を建里乃穴なれ図とあはせ見べし

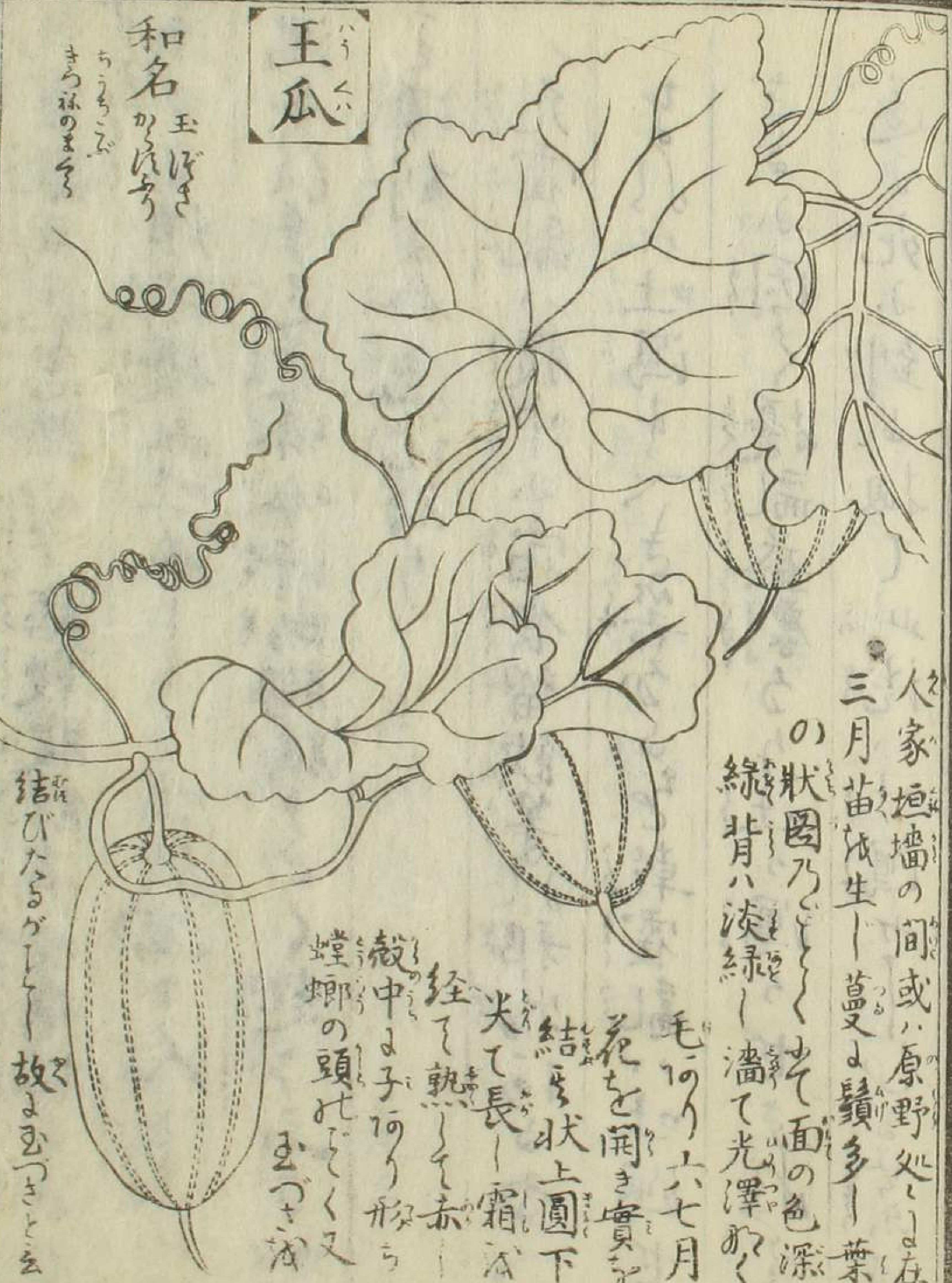
已に死するといへども腹中に猶煖氣ある者ハ左の處に灸すべし

其人を覆に臥しめ両の手を伸両の肘の尖と尖との間へ縄を引其縄の下に當たる脊骨の最中より両方へひとしく脊骨の両傍のきハへおり付て二穴を点し灸數百壯すべし



王瓜

和名 玉づさ からすうり きつねのまくら



人家の垣墻の間或ハ原野処々に在三月苗を生じ蔓に鬚多し葉の状図乃ごとくにして面の色深緑背ハ淡緑にして光澤なく毛あり六七月花を開き實を結ぶ状上圓下尖て長し霜を経て熟して赤し殻中に子あり形ち蟷螂の頭のごとく又玉づさを結びたるごとし故に玉づさと云

乾霍亂病状 忽然心下痞鞕腹肚満疼痛堪がたく漸にして煩躁擾亂し吐んとして吐ず瀉んとして瀉さず手足逆冷冷汗出胸膈かたく起りふさがり頃刻に命危き證なり

凡霍亂ハ腹中に宿食留飲等の邪物あるゆへなれバ吐瀉すべき筈なるを乾霍亂ハ吐瀉せざるに因て擾亂益劇なり吐か瀉かせざれバ遂に死に到るを以て此證ハ吐瀉せしむる妙法を

用ゆべき事なれども其邪物の所在を知らざれバ理法を誤て害あらん故に其大意を載す此證中脘に邪物閉塞てある故に吐瀉ならず其邪物上脘のうちに多く聚たるあり又下脘に多く聚りあるあり是を看る法ハ先手を以て病人の腹を摸索り按ずるに中脘より上のうち格別に緊満あるか又ハ堅き聚塊ありて按すれバ痛ミしく手を近よせざるハ邪物

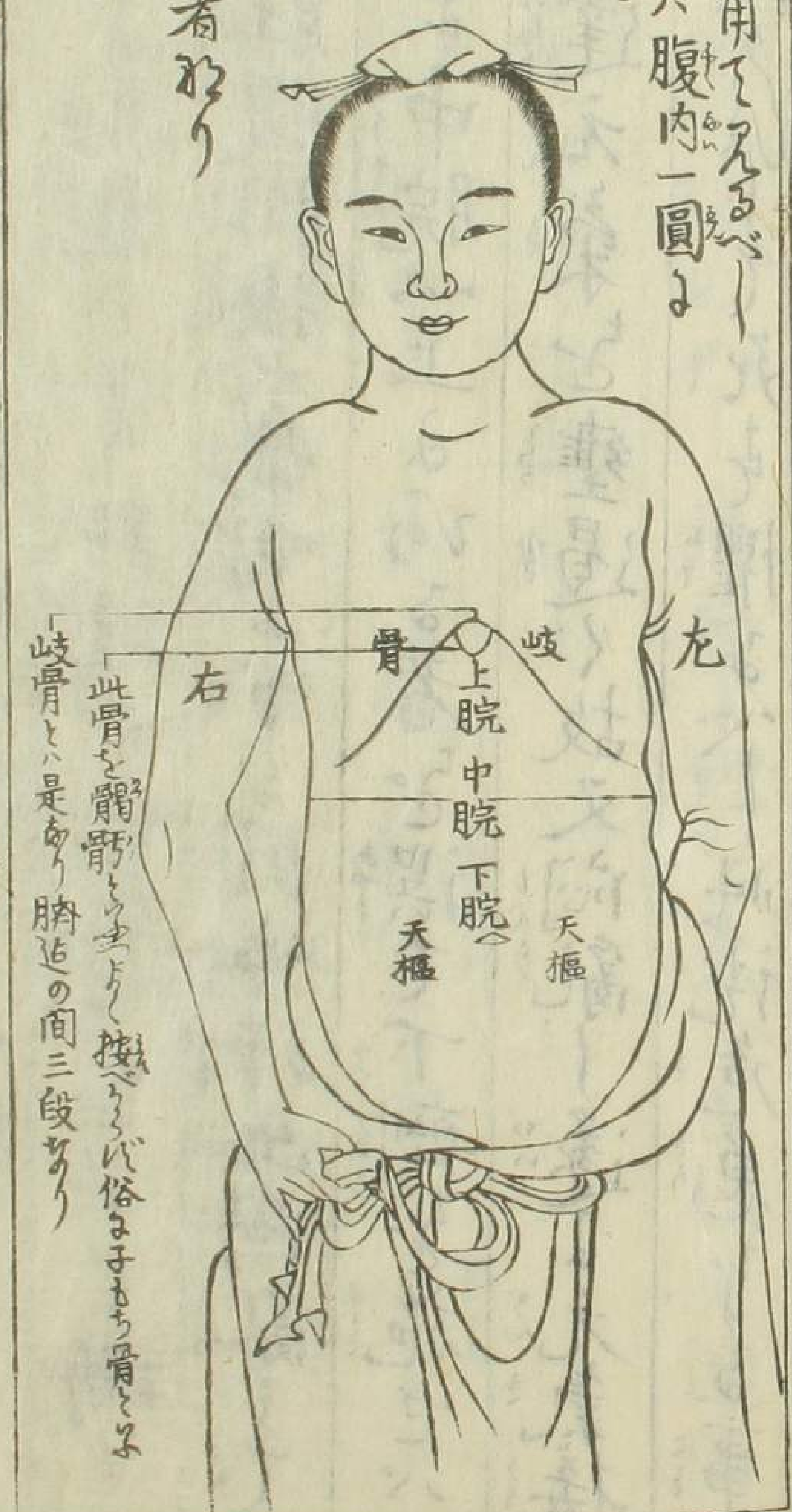
上のごとく多しされど若中脘より下なるごとに
堅き塊ありて按せバ痛むしく手を近づけ
ざるハ邪物下なる方に多しされど邪物なる所在
を見定めんとならバ先人の腹部に分界を弁
知るべし胸前脇骨ハ正中にへ如此骨なり岐骨
といふ此骨と臍との最中を中脘とれ図の如
し

中脘ハ前の中風の條に詳なり岐骨
ハ此條の前巨闕の所に詳かなり

腹部分界圖

病初乃時ハ塊物の形有無在所も
えにくきものなる故に早く

心を用てみるべし後にハ腹内一圓に
膨脹して
塊物の在処知
ざる者なり



扨右邪物の所在を能く見定る上にて上に
在バ吐方を用ひ下にあらバ下剤を用ゆべし
吐を發すれバ瀉も付浮せバ吐も發するを

のあり又瀉して吐かず吐て瀉さゞるものあり別に療法あり右療法如是然るに若中脘より下に邪物ある者に誤て駿烈の吐剤を用ひバ徒に其氣ばかり升提く似乾嘔甚しく漸く小肚腹膨脹水漿咽に下らず冷汗出悶亂して死する中脘より上にかゝる者を誤て下剤を施せバ上達の氣を壅遏ぐ故又悶亂し遂に元氣接續かずして死する懼るべし此説危急なる事

風前の燭のごとし病發に理を失へバ後に適當の薬ありとも効なし

療法 先心下より悪心或ハ乾嘔などし心下に邪物ありて按て痛むハ須至極鹹き塩湯一茶鍾を飲しめ指を咽に挿て或ハ紙撚又ハ鳥の羽を咽に入れ探りて邪物を吐出してよし若夫にても吐ざるハ再び一杯を飲しめ前のごとく探り吐せてよし ○又方濃塩湯の中へ童子の小便と

生姜の絞汁を加へ頓に服するもよし○又方
醍醐を微温めて飲咽を探り吐てよし炒鹽熟灰
を紙に裹胸腹を熨べし 前の食厥の條と参へ看るべし
心腹共に痛られを按バ心下中脘の邊共塊ある
ハ先塩湯ぬるくして飲て咽を探吐すべし吐で
後必大便も通べし若大便せざるハ檳榔子 薬店にあり
二匁童便茶甌に半分水茶甌に一杯入八分目に
煎て服さしむべし○脹満吐下せざるハ生紫蘇

を搗汁を取飲しむべし乾紫蘇ハ煮汁を飲し
むもよし○臍中へ塩を填て多灸すべし
中脘以下小腹へかけ絞るが如痛む是を按ハ中
脘より下腹の方小塊物ある者ハ厚朴 薬店にあり を
生姜の汁を付炙研末となし白湯にて二匁許を
用ゆ或ハ厚朴剉炙煎姜汁を入拌用ゆ或ハ肉桂
枳實 二味薬店にあり 等分○右の諸方を用て後檳
榔子童便少加へ水に煎じ用べし○痛強く死ぬ

んと成るハ巴豆 薬店にあり 皮を去少く炒研爛 唐大黄乾姜 唐ニあり 二味共に薬の末各一匁蜜にまぜ大豆許を三ツ四ツ程煖水にて用ゆべし暫して吐下ありて愈

疔毒昏憒 疔の毒はげしく氣を失なり 附 疔瘡 紅絲疔

病状 凡人平居無事にして暴に死る者あり何故なる事をしるべからざるハ撚紙に火を點し死人の遍身を見るべし若小瘡あらバ是疔毒内に入るなり 疔瘡の状委しく下に記す 面部等の顯たる所に生ずるハ見易き故に知易し身體手脚乃隠るる所に生じたるハかんがへがたきゆへ知りがたし故に往々見誤る事あり又ハ其初發に憎寒壯熱

あり て傷寒と會て療理し救ハざるに至る者
あり此證急に救ハざれバ半日に死す死して後
屍に紫黒の点あるべし疔毒なり故に此證緩
にすべからず

療法 先小瘡の上に灸すべし 疔瘡灸に灸すべし然ども昏憒
ざるものハ灸甦て後に雄黄 薬店にあり 一味末とな
し酒にて服すべし麝香 薬店にあり 少許を入る最
よしとす○又方甘草 薬店にあり 菉豆粉辰砂 薬店にあり
各等分細末にして白湯にて二三匁ほど用ゆべし
○又方蒼耳 図説下にあり 一握生姜三匁一ッに搗爛く
泥のごとくし生頭酒一椀を入和匀て絞り渣を
去て熱酒にて服し汗大に出るをよしとす○
又方菉豆と野菊花 図説下にあり を搗和て熱酒に入
酔ほど飲べし疔瘡へハ蒼耳の根苗茎葉共に
焼灰となし醋或ハ米泔或ハ靛 藍染家にある藍の濃水なり に
調疔の上に塗べし毒根出て愈 此外塗薬附薬下の條と参べし

疔瘡の状初發ハ僅に粟粒許なる小瘡にして痛こなし或ハ衣類等に何物にても物に觸て忽疼痛を發することあり或ハ惟微痒を覚るに就て抓破とひとしく忽疼痛を發することあり然しながら尋常なる小瘡に比すれバ四畔の堆核強し紫色を帯て邊麻ひ痛も常の小瘡と自異なりて上悪寒發熱四肢沈重心悸頭疼頭眩等の證ことあり此證種々なれ變態定りなし疔の生ずる所も亦定なし頭面耳鼻口目の邊并に手足骨節の間惣て肉薄き所に生ずるもの多り急に理療せざれバ毒氣内攻して死に至るなり

療法 急に針にて疔の頭なる処を刺し悪血を擠し出し又ハ人をして吮出さしむべし疔の処ハ肉強く針しても痛ざるもの有り 針ハ三稜針をよしとす 無き時ハ物縫針にても 針ぬくもよし 針志る跡へ後の傳等并り服薬ハ用ゆべし然し針ハ未練なくてハ事を誤る

事あるもあらバ如き丈ハ外科を邀く任
すべし○拳螺図説後にありの靨を焼灰にして末とし
なし醋に和て疔の圍二三分四方を除てつけ
四畔の堆核ある処へ塗乾バ疔の頭より黄水出
て愈若疔の頭まで塗バ毒を擁て大害あり○
針を刺たる鍼孔の内へハ蝸牛図説後にあり殻共に
搗爛泥のごとくして貼敷てよし○又方園庭
に栽たる菊花若花なき時ハ茎葉又ハ根にてもよし

搗絞汁を温酒に和て飲べし其渣を鍼孔の邊
に貼てよし○又方益母草図説下にありの葉搗く
塗ばよし○又方明礬薬店にあり三匁葱白七本搗爛
七塊に分一塊を服る毎に酒一杯にて送下し衣
被を厚く蓋ひ汗をとるべし若汗出ざるハ再葱
白煎汁一鍾を服し少頃して汗出バ従容と蓋た
る衣類を減すべし○又方豨薟草五葉草大薊三種
共下に図あり大蒜和名にんにく分擂爛て熱酒一椀を入

絞て汁を取り服ㇾ汗出て効あり豨薟一味熱酒ニ調服亦よし○又方蕺菜図説下ニあり搗爛付てよし痛甚ニ最よし付る當分甚痛とも取去ざらしむ○又方蒲公英図説下ニありの白汁を取多く塗てよし

此外前の疔毒昏憒の服薬互ニ用てよし

紅絲疔 疔瘡脚ニ生るハ必紅絲を引く臍ニ至る手ニ生るハ紅絲を引て胸ニいたり唇面口内ニ生たるハ紅絲を引く喉ニ入る臍ニいたり心ニ至り喉ニいたる者ハ嘔逆迷悶ニなりて死を致ニ速ニ療法を用ゆべし

療法 凡手足面部等ニ黄泡或ハ紫黒色の泡を生じ夫より紅線一條引上らバ其線至り盡処より三分ほどのこし紅線の上深二三分ほど鍼を以て刺線の両方より指頭にて悪血を擠出すべし其跡へ前の疔瘡乃傳薬を塗てよし服薬も方と前方を用べし

凡疔瘡に限らず手指の小瘡疥瘡の類なりとも生じたる時手を振て歩行をすれバ生腫物よりして紅絲を引て上ることあり疔瘡にかぎらずとも右の法を以て針して悪血を出すべし

蒼耳

和名をなもミ

此草春初て苗を生じ夏に至て高さ四五尺許になる

地方によりてめなもミと云

茎圓くして黒き斑点あり

七八月のころ葉の間の枝に又を生じ梢に実を結ぶ其實桑椹にゝてなれバ短小にして刺あり人の衣類に粘てはなれざるものなり

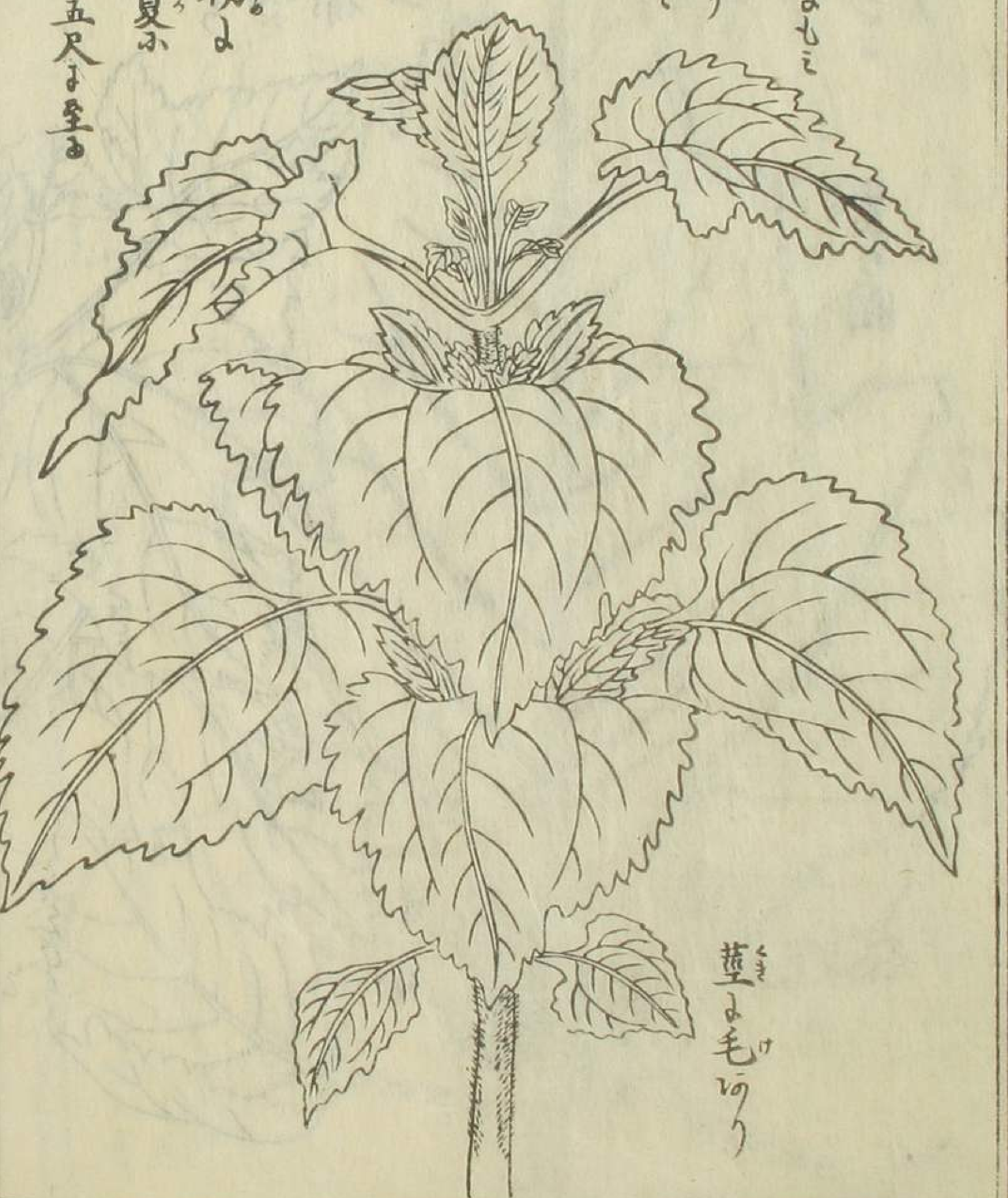
葉の圖

實の圖

豨薟

和名めなもミ地方よりてをなもミと云

此草春の初よ苗を生じ夏ニ至て高さ四五尺ニ至る



葉相對し其状ハ蒼耳の類にて槎牙深して薄輭なり秋ニ至て葉の間より枝を生じ花攢簇して黄色なり

五葉草

和名 やひとそか きじむしろ
やぶからし
びんぼうづる
ひさごづる

春の初苗を生じ夏に至り蔓延て原野或ハ人家籬援乃間に多し藤ハ柔にて紫赤色に直稜あり葉ハ踈歯ありて五葉づゝ茎端にあり七八月淡黄花簇り開大さ粟

花の図

莖圓くして赤紫なり

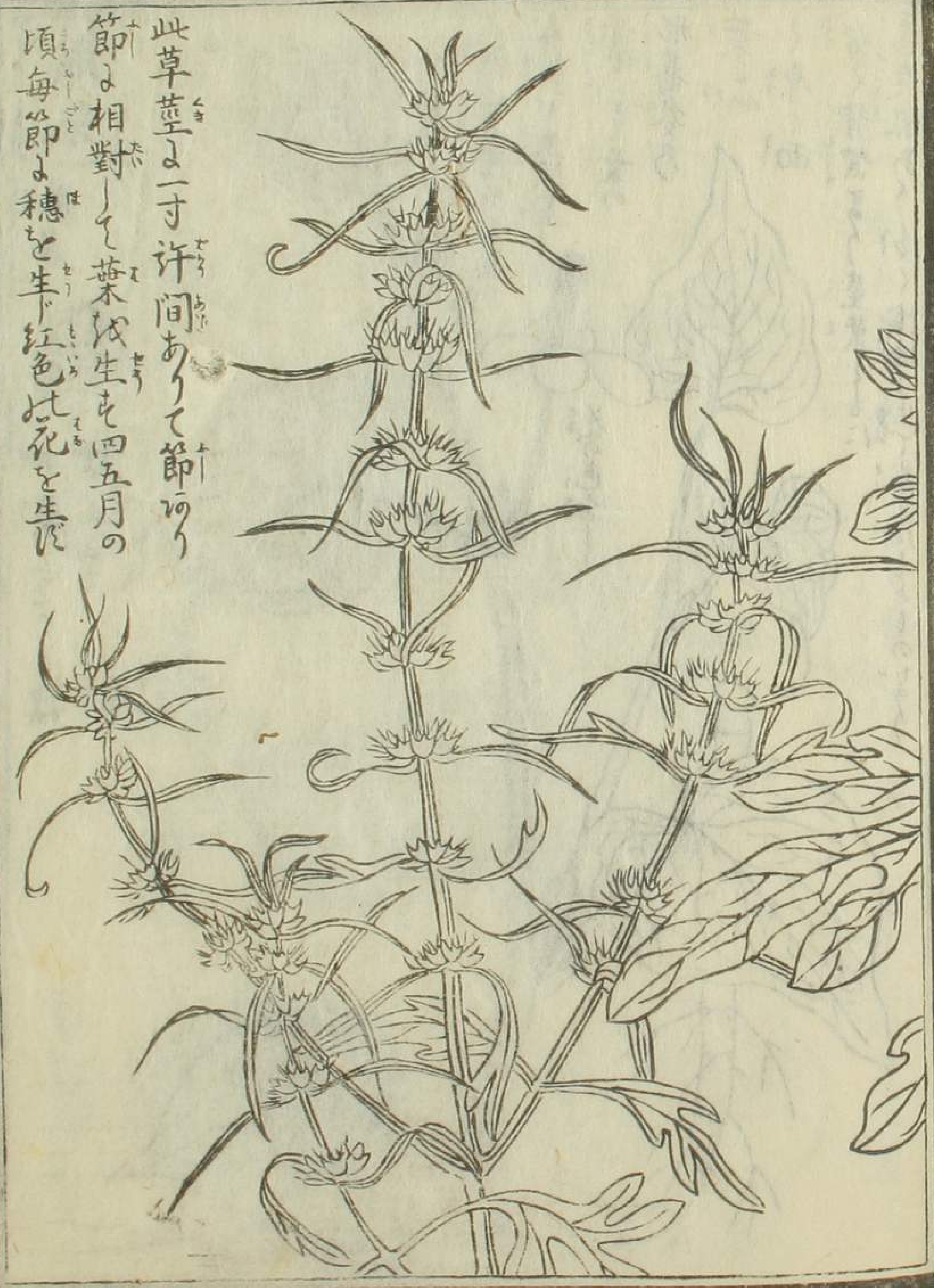
粒のごとし四出なり秋の末實を結ぶ生ハ青く熟すれバ紫黒色なり根ハ白く大さ指乃ごとくなるあり

益母

和名 めはじき
俗に にがよもぎと云

春の初苗を生じ夏に入て高さ三四尺許葉艾に似て葉の背青し茎を方にして稜あり

此草茎に一寸許間ありて節あり節に相對して葉を生ず四五月の頃毎節に穂を生じ紅色の花を生ず



蕺菜

和名 どくだみ 十薬 ぢごくそば
入道ぐさ ばうぞくさ

山陰山谷溼地に在 黄
春苗を生じ茎赤紫にて葉の形蕎麦乃葉に似て厚く面青く背紫なり茎葉ともに甚臭氣あり多く陰地に生て蘩茂するものなり

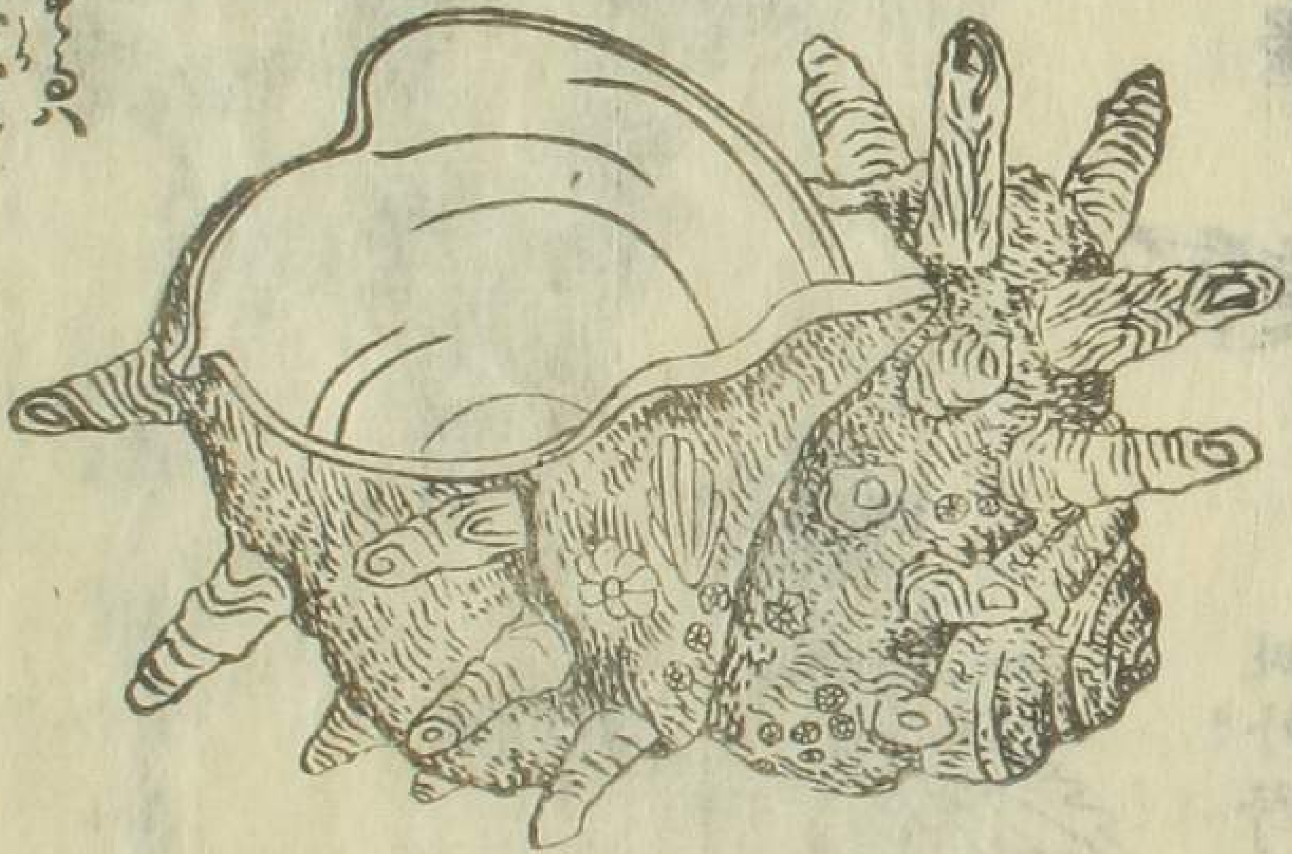
拳螺

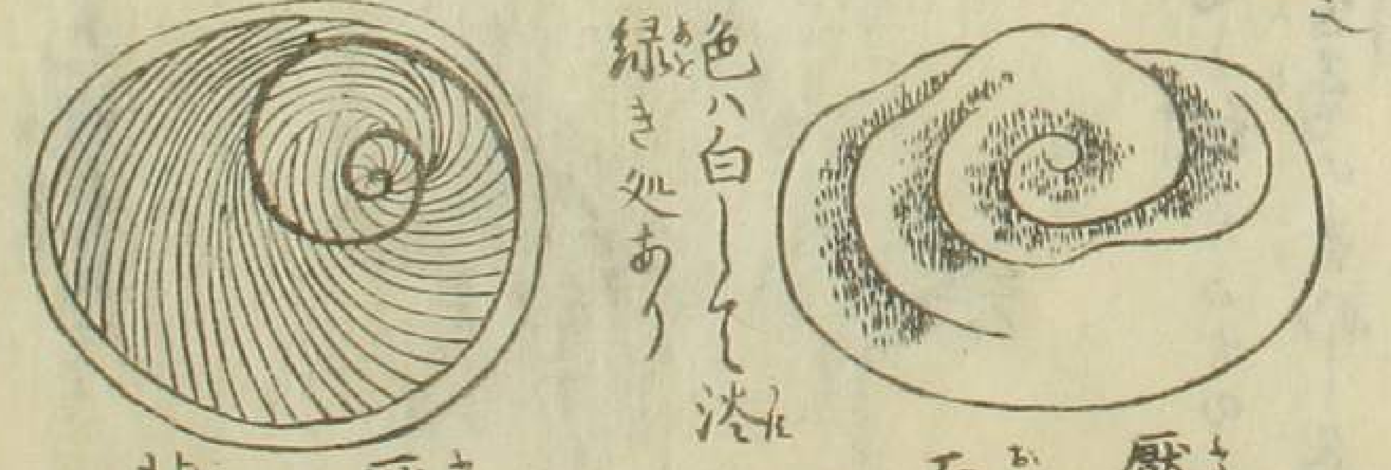
和名 さゞゐ
又 さゞい

状辛螺に似て圓り殻青白にて尾盤起り殻に尖る角數本あり靨ハ赤甚厚く堅くして圓なり高く起て凹に其肌ハ鮫皮のごとく色白し赤旋紋あり肉ハ二端ハ黒く一端ハ黄なり四國九州海中に産するハ状まるくして角なし然れども功用ハおなじ用ゆべし

又靨に毛ある児あり佐州にてめぐらげいと云

靨の状如是薬に用処之





靨 面　靨 背

野菊花

和名 のぎく

状形芬芳全く菊にして小し惟花葉共に小細なり秋の末に花を開く亦菊に似て小なり心も瓣も皆黄色なり處々野邊に生ず

○雞腸兒花も又和に野菊と呼花乃色淡紫に碧花にして絶て菊の氣なし

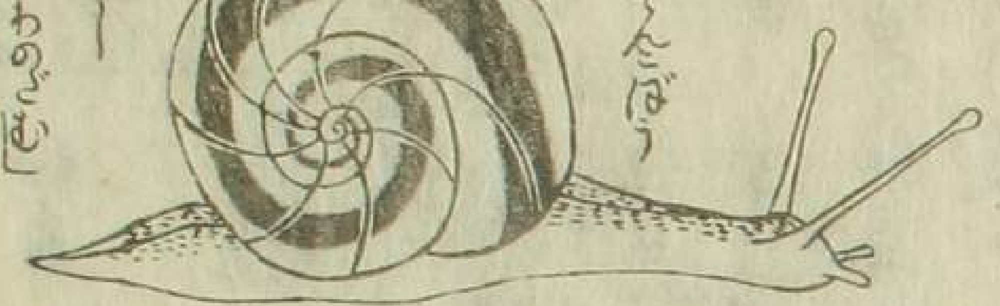
常の菊より葉の色浅青なり

此外野菊と称するもの二三品あり皆菊の香なし名に依て採誤るべからず

蝸牛

和名 かたつむり

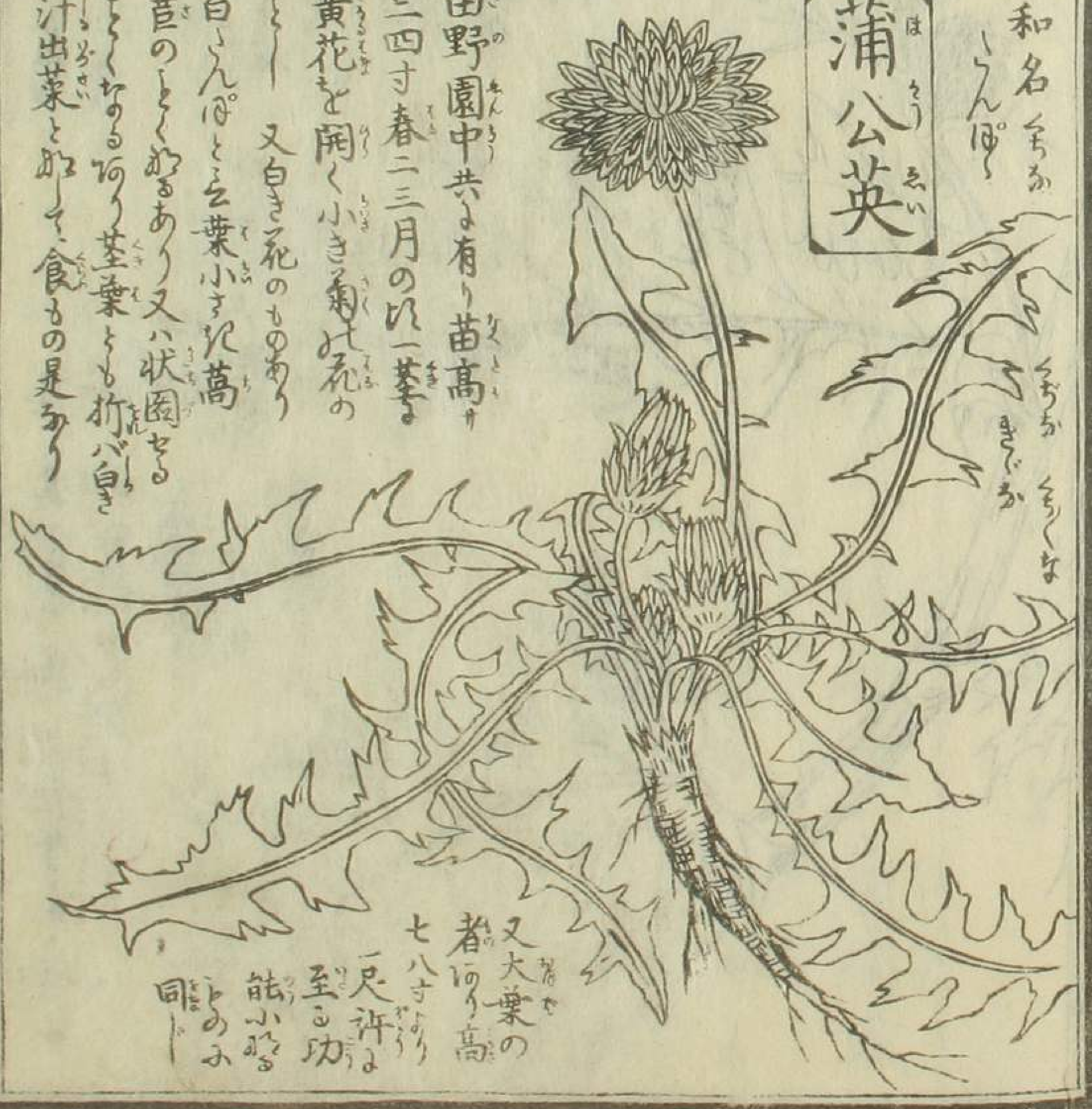
竹林池沼の岸に生ず雨の後最多し大小あり大なるを用べし殻あるハかたつむり殻なきものハなめくじりかたつむりなき時ハ代用てよし又和名でんでんぼうたいりてうしまいくむしあいくわのごむし



蒲公英

和名 たんぽゝ ちゝな

田野園中共に有り苗高サ三四寸春二三月の比一茎に黄花を開く小き菊の花のごとし又白き花のものあり白たんぽゝと云葉小さき萵苣のごとくなるあり又ハ状圓なるものなるあり茎葉とも折バ白き汁出菜と称して食もの是なり

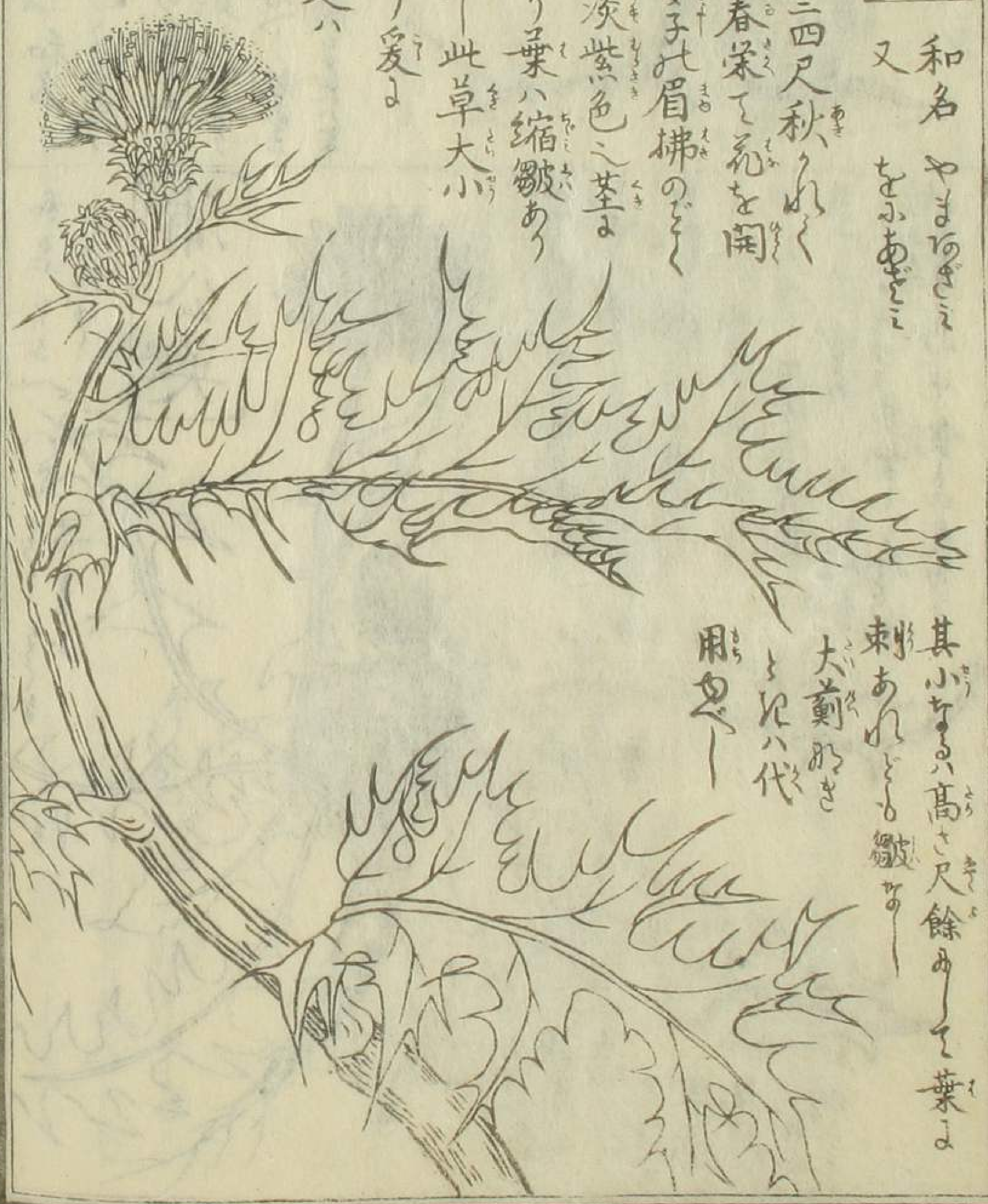


又大葉の者あり高サ七八寸より一尺許に至る功能小なるのみ同じ

大薊

和名 やまあざみ
又 をにあざみ

苗高さ三四尺秋ハおく冬生し春栄て花を開花の状女子の眉拂のごとくにして淡紫色也茎ニ五稜あり葉ハ縮皺ありて刺多し此草大小二種あり爰ニ用ゆる処ハ大なる者なり



其小なるハ高さ尺餘にして葉に刺あれども皺なし大薊なきときハ代用ゆべし

脚氣衝心

脚氣衝心ハ脚氣足より腹に入りむなもとへつき上るなり

病状 凡此證最初に脚膝弱或ハ頑麻或ハ痠痛或ハ轉筋拘急或ハ踵跟足心等隠隠痛或ハ脛脚に胕腫ある等の証ありて或ハ小腹麻痺卒に嘔吐を發し上衝強く肩にて息をなし喘息して白汗出乍寒乍熱煩悶ならずし或ハ精神漸々に恍惚となり或ハ譫語を發し遂に無性となるを脚氣の衝心にて九死一生なり急に理法を施すべし

又は初憎寒壮熱いでゝ全く傷寒のごとくなる有
見誤るべからず
衝心の節に至りて病發に右の如く脚に疾あ
る事を知ざれバ理療に違ひあり病人も心付
ば別のことゝ思ひ告語らば事ハ誤ることあり
よく／＼心を用て問べし

療法 檳榔子 薬店にあり 末にして二匁童子ハ小便に
て用ゆべし生姜汁を加るも亦よし○又方呉茱
萸一匁木瓜一匁 唐木瓜を用ゆべし味酔きものよし二味共薬店にあり 水にて煎
じ服すべし犀角 薬店にあり 屑 鎊又ハ鮫皮にておろすべし 五六
分右煎薬の内へ入攪飲最よし○又方半夏 薬店
にあり 二匁水煎じ生姜汁多く入服すべし○又方
黒豆一合水三合を一合五夕に煎じて飲べし 甘
草を加へ煎て服すも最よし○又方鐵粉 刀鍛冶の削く
づ 鉄の錆くづ何も用ゆべし 鎊ちさきものをよしとす 六七匁水茶碗ニ
二杯入一杯に煎じ飲べし○又方鹿角 地方にありて

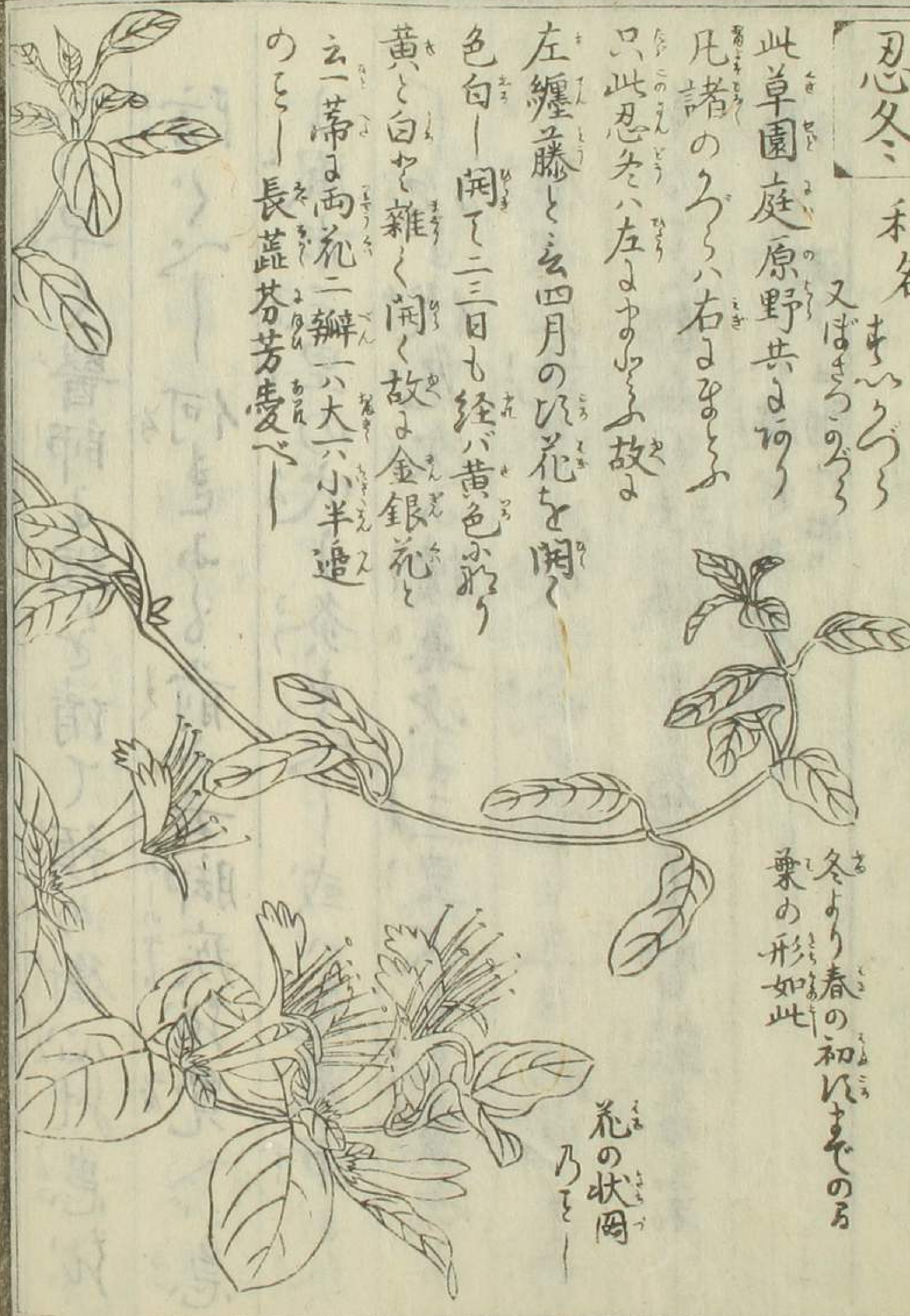
かはきゝといふ末となし多く白湯にて服すべし
又きゝをけし象牙とよし又牛角鯨牙皆用てよし 何も鑢又ハ鮫の皮にて屑〇又方枇杷葉又ハ蜜柑の葉水にてにきんべし
煎じ用ゆ又牛蒡の根 野菜の品なり 酒に浸し飲又忍冬なり
下に図説の葉或ハ花末となし酒にて飲べし
凡人大抵氣力弱ハ常のごとくなれバ心付ねども卒爾起バ脚膝がくつきてよろく蹙倒或ハ脚膝足踝より小腹杯へかけて頑麻を覚

へバ早く醫師に理を請て預め衝心の患を防ぐべし何をなも前に云脚疾を覚へバ急に風市三里の穴に灸すべし或ハ先風市に灸し次に伏兎次に犢鼻次に三里次に上廉次に下廉次に絶骨の穴に灸すべし三日の間に灸する事都合百壮ばかりすべし皆能毒氣を瀉す 以上八處の灸穴図説下に附け出す

忍冬

和名　すいかづら　又ぼきうこのかづら

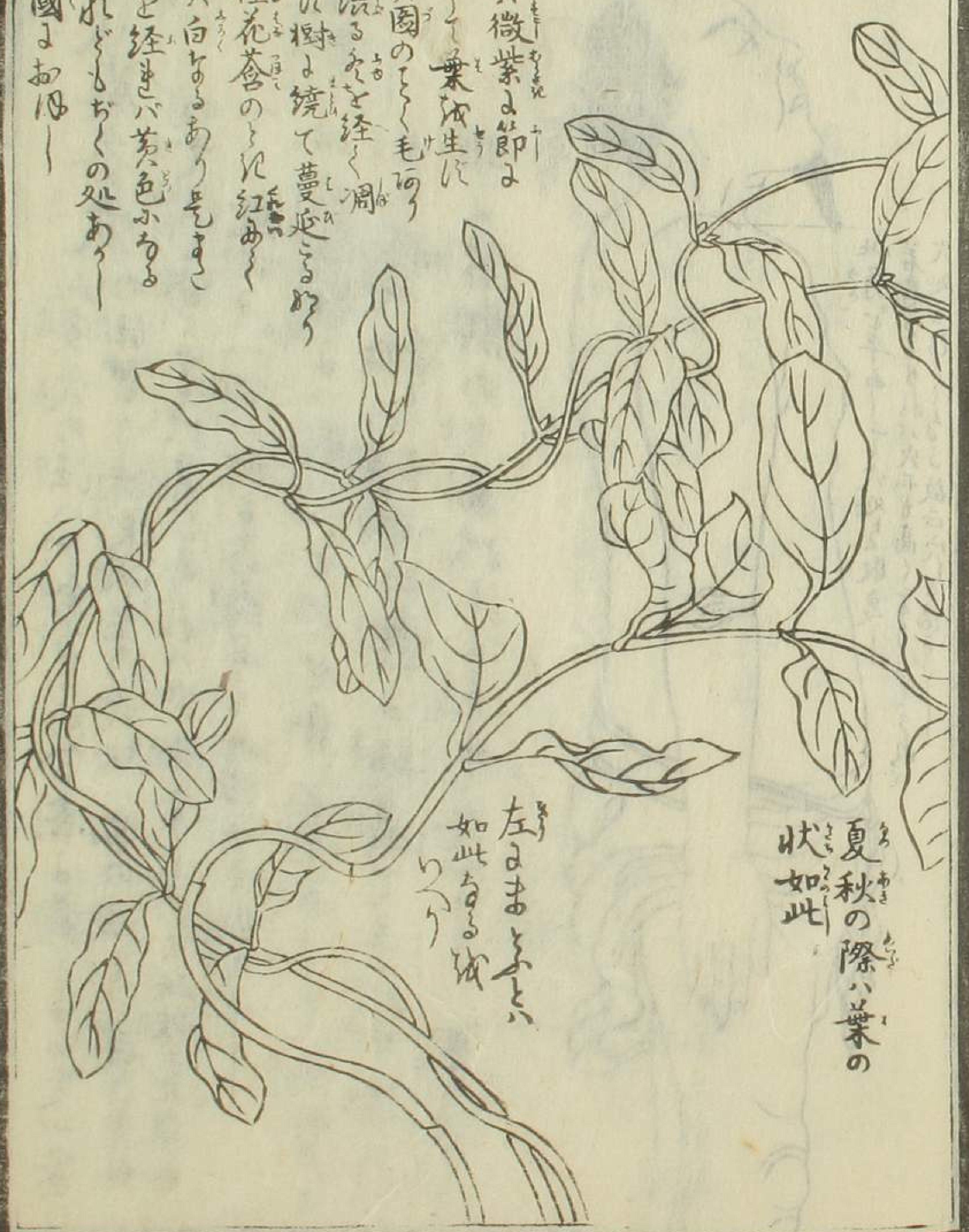
此草園庭原野共にあり
凡諸のかづらハ右にまとふ
只此忍冬ハ左にまとふ故に
左纏藤と云四月の比花を開く
色白し開て二三日も経バ黄色になる
黄と白と雑く開く故に金銀花と
云一蔕に両花二瓣一ハ大一ハ小半邊
のごとし長蘂芬芳愛べし



冬より春の初比までの葉の形如此

花の状圖のごとし

茎ハ微紫にて節に對して葉を生じ
葉ハ圓のごとく毛あり
て渋る気を経く潤
すべ樹に繞て蔓延るなり
一種花蕾のころ紅なる
開ハ白なるあり是もまた
日を経れバ黄色になる
されどもちくの処あり
西國におほし



夏秋の際ハ葉の状如此

左にまとふとハ如此なる蔓をいふ

八處灸穴

此灸穴の法ハ千金方といへる書に載たるにて一家の法なり殊更伏兎乃穴抔ハ常の法とハ違り其外の穴法も皆これ違ひあれバ必脚氣にのミ此法を用ゆべし風市の一穴ハ何れの病にも此法にて取てよし

風市

此穴を取にハ病人を起せ身を平かにして両臂を垂手の十指を舒両の髀に掩着て手の中指乃頭に當髀の大筋の上に点ス是穴なり

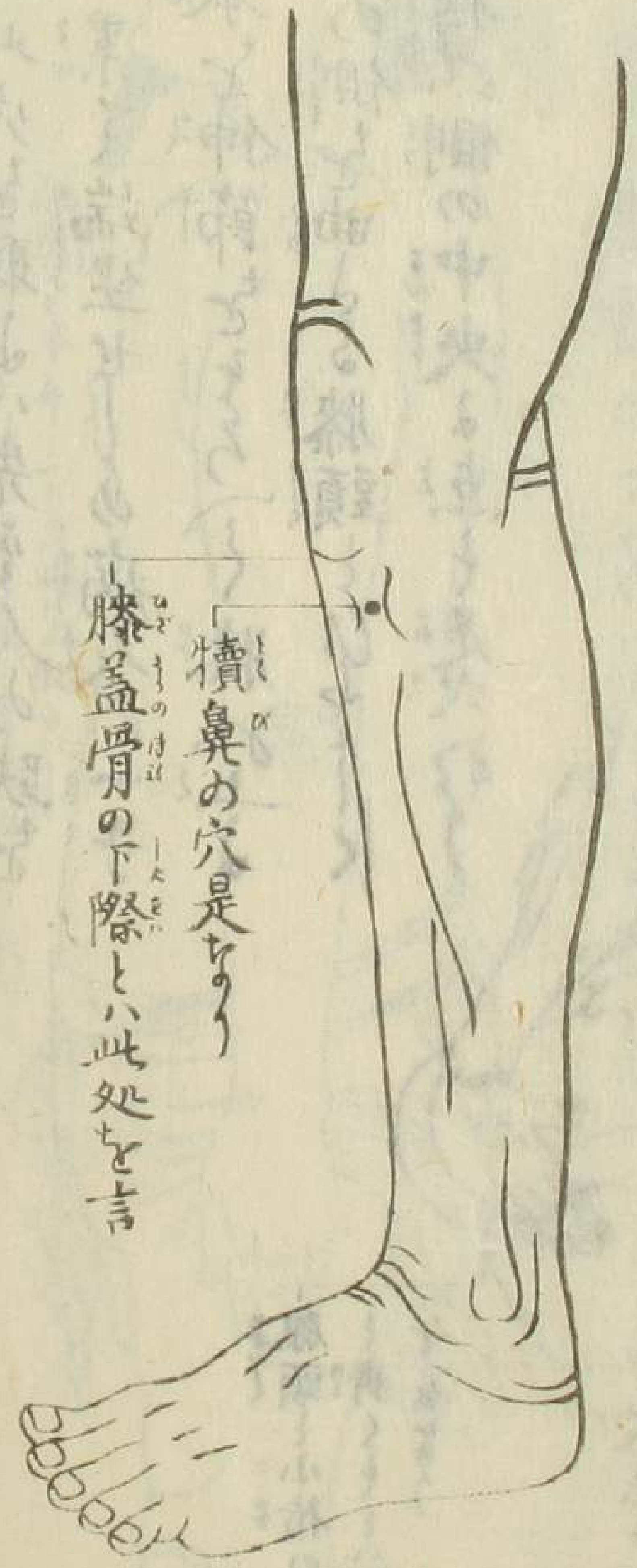
伏兎

此穴を取にハ先其人の趺を累て端坐せしめ病人乃一手の指四本を伸節をそろへて膝の上に置小指の側を曲る膝頭とひとしく上の人指の側の中央に点す是穴なり

是ハ一家の伏兎にて脚氣にのミ用ゆべし

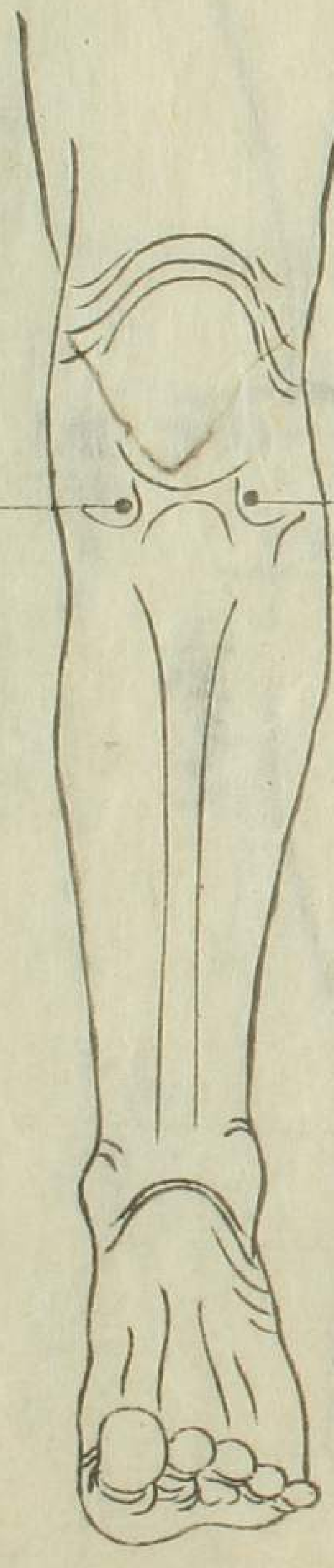
犢鼻

の穴ハ膝頭の外側に在膝蓋骨の下際乃通の外側之見ゆる所ハ平なる様みゆく指頭にて按視きバ両傍骨よく俠解たる様なる形ハ如是処の最中に点すべし



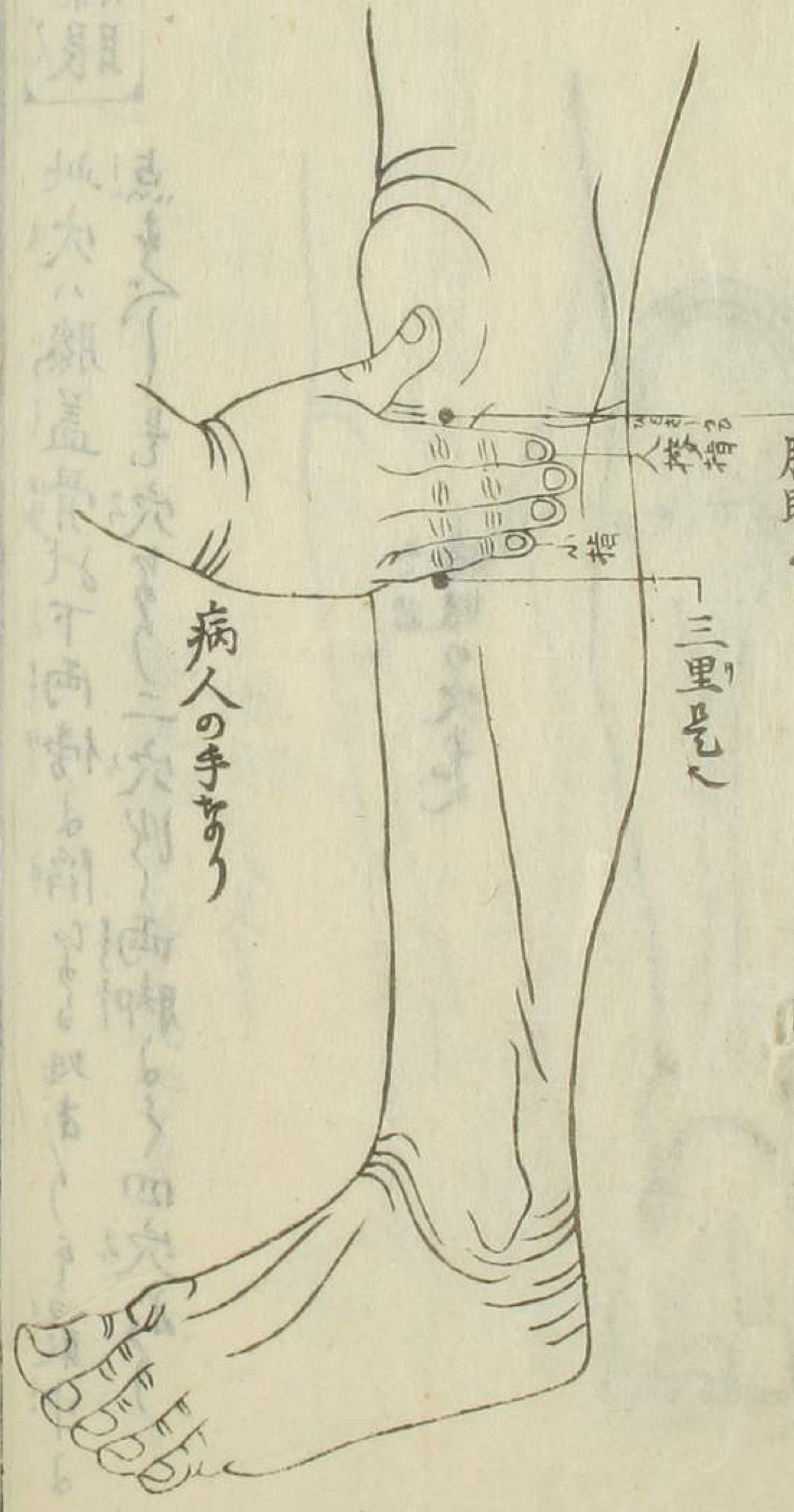
膝眼

此穴ハ膝蓋骨の下両傍に陥なる処ありて其最中に点すべし是穴なり二穴づゝ両脚にて四穴なり



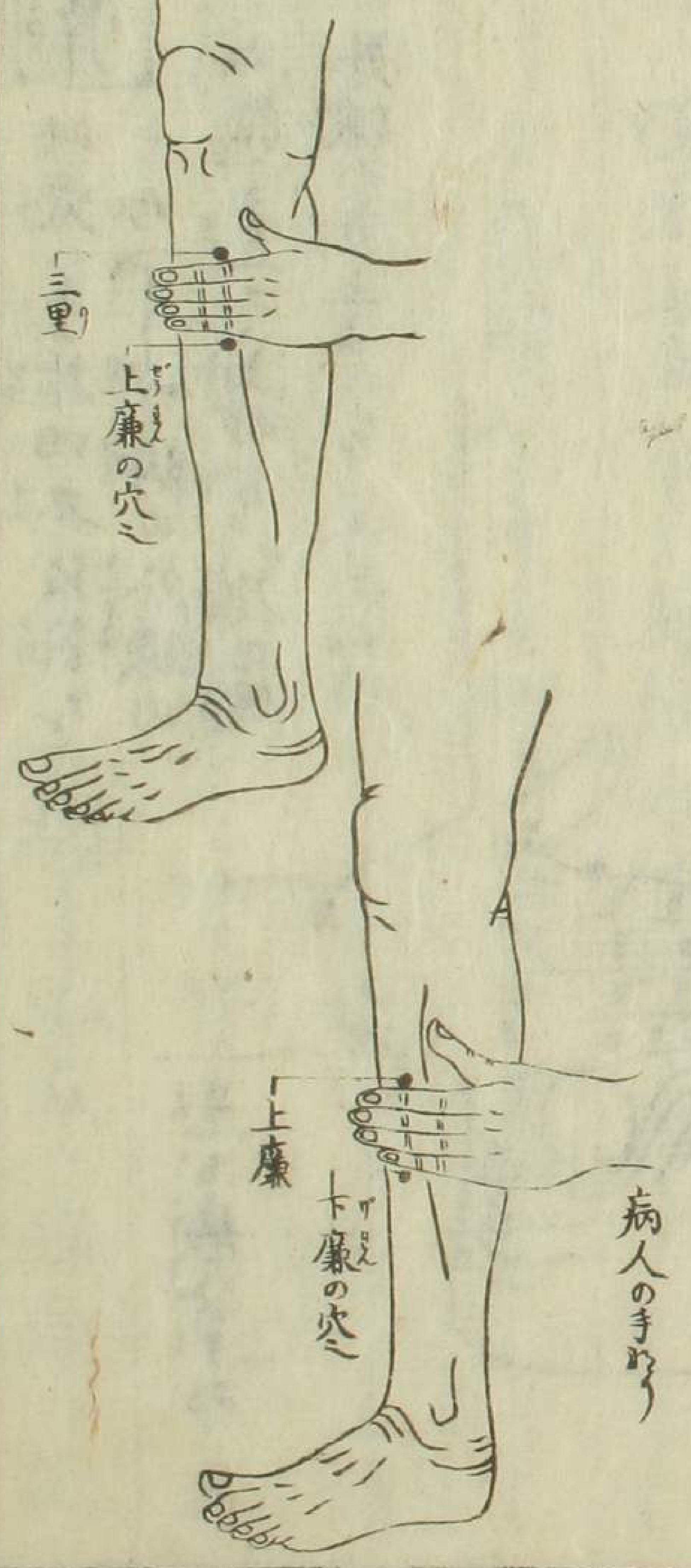
三里

此穴ハ手指四本を節をそろへて伸膝頭乃骨の下際外の方の膝眼の穴より下へ置其下にあたりたる小指きハ傍に点すべし是穴なり



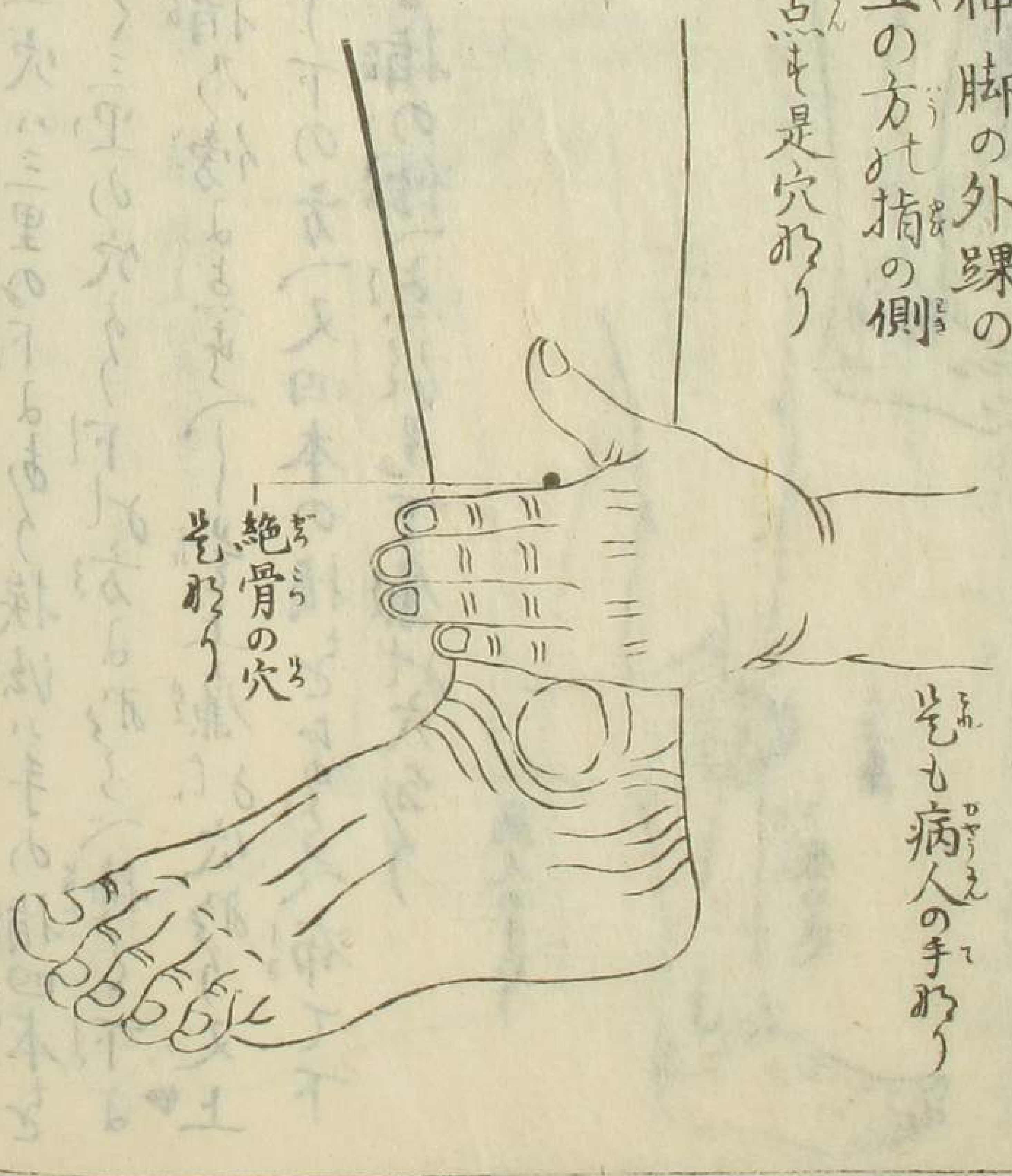
上廉 下廉

の二穴ハ三里の下にあり按法ハ手の指四本を伸べ三里の穴より下の方におろし掩ひ下にあたりたる指乃傍に点すべし是上廉の穴なり又上廉の穴より下の方へ又四本の指をならべ布て下にあたりたる指の傍へ点ス是下廉の穴なり



絕骨

此穴ハ手指四本を節をそろへく伸脚の外踝の上際に置て上の方の指の側外踝の直上に点せよ是穴なり



積氣暈倒

しやくおこりてめがまハれ
疝氣衝逆冷氣入囊を防も

病狀　此證初發に頭痛身熱或ハ憎寒後に大に熱を發し小腹痛ば作て胸と脇肋に引疼甚し汜ハ咬牙ふるへく反張冷汗出て流るゝがごとくかしく死なんとするなり又咬牙反張あくしく卒然に暈倒ものなり或ハ大小便閉るなり又積氣厥逆て心腹共に膨脹て背脊に引痛嘔吐乾嘔或ハ痰沫を吐き或ハ心胸に湊或ハ脇肋へ築

て腹中刺がごとく痛或ハ遂に厥逆あがり死せん
とするものあり
療法 木香 薬店にあり 末となし熱酒にて調服す○
又方赤小豆煮汁多く服す○又方香附子 薬店にあり
末となし白湯にて服す或ハ縮砂の末甘艸 二品共に
薬店にあり 此末少し加へ服す○又方紫蘇の葉を水
にて煎じ服す急なる時ハ熱湯にて攪出し
用ゆ木香末少許を入て良○又方熊膽少許温

水にて化し灌のましむべし 熊膽偽物多きゆゑなり白盞中に浄水
を汲熊膽胡麻粒大ほど紙入るゝに飛旋して迸疾
もの真なり遅きもの偽なり又堅炭にて火に
紙をこし其上へ罌粟粒許を載て見るべし火乃
上にて湧上り漸して炭の内へ滲込て跡なく硫
黄の香をりするもの真なり湧揚泡をるものハ
灰となり唯焦臭きハ偽ものなり又少許を舌の上
へ置に苦き味舌の心へ透るもの真なり苦味薄
きハ偽ものなり大抵をよく辨知るべし
○又方半夏一味煎じ服さしめてよし乾嘔ある
に最よし○衝逆むちうに成しハ火盆に醋を
灌入て其氣を嗅しむべし○又方辰砂 薬店にあり

二三分水にて用へし或ハ熊膽汁を泥汁にて用ゆるも最よしとぞ

疝氣衝逆 素より陰嚢腫痛事有か又腰少腹などに拘急をなし此證あり又尤もはくして忽然起る者あり其證少腹より胸膈まで衝上引疼て前の積氣と同證なれば見分あり

療法 韮を擣て汁を取て飲○又方檳榔子 薬店にあり 末にし温なる酒にて服す○又方唐木瓜 薬店にあり の末酒にて服す○又方呉茱萸 薬店にあり の末を温酒にて服す○又方小蘹香杏仁 二味薬店にあり 末にし葱白少し入温酒にて服す○又方甘草末白湯にて服す○又方衝逆強く痰嗌口に塞ハ香附子を末にし薬店にあり浮石 海より出る者用ゆべし山より出るハ焼石なり薬に入るべからず 薬店にあり嘗てみるにけかる者試用ゆ 鹽の末等分にして白湯に生薑の絞り汁を拌て服す○又方衝心たちし迷あるに杉乃木の節を煎じ用ゆ小木ハよろしからず

ば一尺まはり程より以上のをよし若節なく
バ根に近き所の木ハ中心の赤き所を用べし

冷氣入囊 て痛強く陰囊縮入く腹急痛絶入と
まゝある事あり急ざれハ死に至るなり

療法 山椒を木綿の袋に入て陰囊を包むべし
○又方 葱の白根を剉て炒り熱き所を木綿切に
包ミ陰囊を蒸すべし 乳香 薬店にあり の末加る最
よし 又茴香 薬店にあり を炒て用るもよし ○又

方 白花山茶實 和に椿の字用ゆるもあり 或ハ生にて嚼食ひ
又ハ干きざみて煎じ服てよし ○又方地膚子
草箒になるもの 實なり 炒て末となし酒にて服すべし
此外服薬方ハ前の疝氣衝逆乃方と同じ参考へ用ゆべし

癲癇卒倒　てんかんハ病にて俄にたおるゝ

病状　今迄無事なるに似て忽ちつと聲を發して仆者多し又聲なくして倒るゝ者あり何れも瞪目直視或ハ上竄し白沫を吐手足搐搦目瞤動或ハ偏引揺頭振身咬牙或ハ息絶脈も絶たるがごとく口開身軟にして死人の如なる者あり然れどもながきハ一時又ハ半時短ハ暫時にして舊にかへり醒れバ夢のごとし是癲癇の證候なり

療法　先皂莢〔図説中風の條にあり〕煎する汁を鼻孔の内へ灌入るべし涕唾を出して甦る若皂莢なき時ハ冷水をおほく鼻へ灌入べし

或ハ　先取嚏法を用べし〔取嚏法ハ前の中風乃條にあり〕或ハ石を焼醋の中へ焠て其氣を嗅しむべし勿論頭髪を挈嚏を出さしむべし○服薬ハ熊膽小豆許を白湯にてとき灌下さしむべし○又方釣藤鈎〔薬店にあり〕甘草一匁づゝ水に煎じ服さしむべし○又

方白礬〔薬店にあり〕を末となし是を文挽茶五分煎じたる茶にて服すべし○又方辰砂〔薬店にあり〕二三分水にとく灌下し或ハ熊膽のとき汁にて用るも亦最よし

○百會〔図説中風にあり〕に灸をすべし壮数に拘ハらず甦て止べし

皂莢汁を灌入て甦て後涕唾にてやまざるハ塩湯をおほくのましてよし

血厥 又鬱冒といふ

病状 人平居疾なし忽死人のごとくにて動揺せず黙て人をしらず婦人に尤も此證多し

療法 半夏の末或ハ皂莢（薬店にあり猪牙皂莢といふを用ゆべし常皂乃莢乾さるもよし圖説中風の條に出ス）の末を鼻に吹込嚏を取醋を火盆に傾け入れて烟を鼻中に沖入しめてよし

○梅の實乃熟したる肉を口中へぬり入るべし

梅實なき時ハ塩梅の肉にてもよし

○辰砂

の末湯にて五六分用てよし○又方川芎香附子右末にして二味等分白湯にて用ゆべし

波也宇知加太 先輩青筋と云病のよし云説あれども穏ならざる故に俗称を挙

病状 平居無事にして初は肩背微し痛悶を覚へ後俄に肩張痛堅満て面色青惨唇黒手足厥冷或は悶乱し或は嘿々として精神恍惚となる速に救ざれば死を

療法 急に肩背の堅く凝たる所を小刀様の刃物にて割き破り悪血を出すべし血多く出人心付たる後に刺たる痛へ馬糞汁を塗ておくべし

服薬 青松葉を煎じ用べし急なる時ハ青松葉を嚼く病人の口をあけて其汁を吹込のましむべし○又方刀豆の實を末にして白湯にて灌ぎのまさすべし急なる時ハ剤く用ゆ○又方胡椒の末温酒にて服さ

○又一説あり人俄に腹疠痛漸く小胸膈へ攻く煩躁悶亂し顔色青惨或ハ黯黒唇の色黒なり昏憒して死す

療法 速に下唇を反して鍼にて刺し又ハ小刀様の物を以て割て黒血を出すべし血一合餘も出せハ忽に愈るなり若一ヶ処割く血出ざる者ハ二ヶ所も割く血を出すをよしとす

此病海濱の漁人舟子など往々患るものあり山陵に居る人此を患るを聞ず北國海濱にてハ此病を波伊と名づけ能其療法を知者多し他邦にハ知ざる処もありて死る人もあるよし聞及

ぬ異國の方書に云る沙病の中に絞腸沙なるべし

鍼暈　はりして目をまはすなり

凡人鍼して暈倒ことあり鍼乃上工にもまゝある
ことなれども其法ありて再鍼して速に甦者也
至て初心乃ものハ驚愕きて處置を失ふもの
なれバ聊か救法の大意を載のす

療法　袖をもつて病人乃口鼻をおほへバ息氣をふき
回さるものなり其時ハあつき湯を與飲しむべし
前法の如して氣回らざるハ手の三里に鍼をし

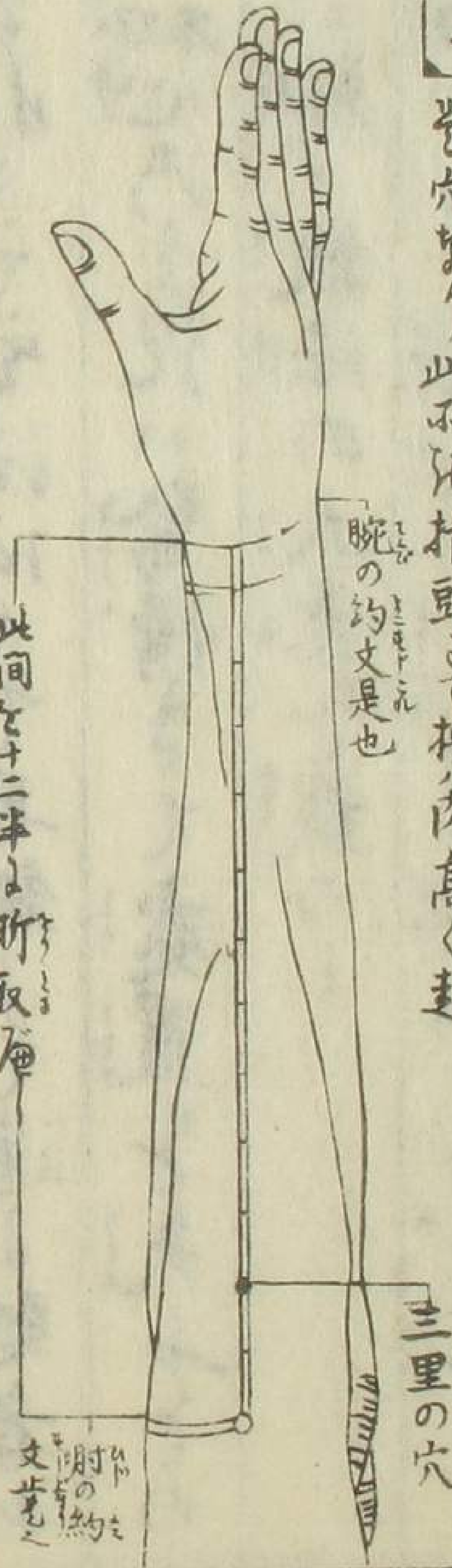
○若肩井等上部に鍼して暈倒せバ足の三里
に鍼してよし

足の三里図説
前の中風にあり

手三里

此穴ハ肘の約文の上より手さきの方へ二寸に点すべし
是穴なり此ハ指頭にて按バ肉高く起

此穴を挟にハ腕の約文より肘の約文までの間を藁にて度り
十二半に折一尺二寸半と定て此寸にて取べし



入浴暈倒　湯氣にあたるなり

人湯を浴て時を移し又ハ熱き湯に入て湯氣
に中遂に眩暈して倒仆し人事をしらざるもあり
或ハ衂血を出ざるもあり

療法　先冷水を面に噴べし或ハ惣身に水を
澆かけくもよし其上にて塩水を飲しむべし又
酢を一杯程のましむべし

中巻衂血の條考べし

醉船　船に醉○轎に醉山に醉を附

人船に乘て眩暈或ハ嘔吐或ハ瀉頭痛煩悶へる事あり

凡船に注たる人渇ありとも水を與飲しむべからずのましむれバ死に至ることあり

療法　急に童子の小便を飲しめてよし若童便なき時ハ自己の尿を飲べし○又方嚴醋を一口飲てよし○嘔吐止ざるハ半夏陳皮茯苓の

三味等にせんじ飲てよし○又方生蘿菔を擦喫ふべし○又方梅肉ばかり含てよし○又方硫黄（發燭に用るものなり）を嗅べし

○人轎に乗漸くに風雲中に坐するがごとく頭痛甚しく悪心くなり最甚は暈倒に至る

療法 速に熱湯の中に生姜の絞汁を入拌飲しめてよし又半夏一味煎じ服す○又方辰砂（茶店にあり）少許舌上に置白湯にて送下 凡此證冷水を飲べからず

○人終日嶮岨なる山中を經歷すると忽恍惚として眩暈し顔色青慘人心地なく遂に倒れて人事を知ず無性となる俗人山の神の譴など云もの是なり

療法 速に酒を燗して醉ほど喫て平地に臥する事一時許にして精神舊に復す○又方酢を飲て安臥しめてよし

○人の斬きたるか又ハ怪我して血など大に出

たるを傍よりみれバ面色青くなり暈倒するし
あり前の方法用て甦るなり

廣恵濟急方上巻